

戦争を知る

門池小学校 四年

二 見 映 舞

わたしは、戦争のことを何も知らなかった。そこで、夏休みに『はだしのゲン』というアニメを見て、いろいろなことを知った。

太平洋戦争では、広島県と長崎県に原爆が落とされたことを初めて知った。原爆は、多くの人の命をうばう怖い兵器だ。原爆で多くの人がやけどを負って皮ふが溶けてしまったり、ガラスがささったり、体が溶けてなくなったりした。運良く助かったとしても、火事で亡くなったり、栄よう失調で死んでしまったり放射線ほうしゃせんでひばくして病気になることもあった。わたしは、アニメを見て、なぜ戦争が起きたのか不思議に思ったので、調べることにした。

太平洋戦争は、日本がハワイをきしゅうこうげきしたことから始まったと知った。その時のこうげきで日本は六十四人亡くなって、アメリカは民間人をふくめ約三千五百人亡くなった。わたしはおどろいた。日本が始めた戦争だったからだ。

もっと戦争のことを知りたいと家族の話聞いた。わたしのひいおじいちゃんは、戦争でビルマに行った。ビルマでの戦争はとてもはげしくて、同じ部たいの人はひいおじいちゃん以外はみんな死んだ。ひいおじいちゃんは、もう戦争の話をしたくない、とよく言っていたそ

うだ。きつとそれほど辛い体験だったのだろう。そしてひいおばあちゃんも東京に住んでいたけど、空しゅうがひどくて沼津ににげたことがあったと言っていた。

今は、食料や家、学校もあるけどそのことを当たり前と思ってはいけない。戦争がはじまったらあつという間になくなる。だからわたしは戦争をしたくない。大切な人や家族を失いたくないから。

今ウクライナとロシアが戦争をしている。わたしと同じ年の子が、毎日こわい思いでくらしているかもしれない。そう考えると一日も早く終わってほしいと思った。

戦争のことを知ることでも前よりも強く戦争をしてはいけないと思った。

八月十五日

第一中学校 一年

松田成未

私は八月十五日で十三歳になりました。

しかし、この日は「おめでとう」と、気軽に言える日ではありません。「戦争」という悲しい出来事を思い出す日だからです。戦争が終わって七十七年になります。この間、私を含め、八月十五日に生まれた命がたくさんあります。この日が「おめでとう」と言える日になっ

てほしいと思い、この作文を書いています。

今年も終戦記念日の八月十五日がやってきました。この日のテレビ番組では「戦争はともこわいです。二度と起こしてはいけません。」と多くの人が言います。実際に戦争を体験した方々は、戦争のこわさを具体的な言葉にします。人が死んでしまった時の怖さ。自分が死にそうになった時の恐さ。食べる物がなく倒れそうになった時の空腹感を話されます。しかし、私には分かりません。だから、知りたいと思いい、知らなくてはいけないと思いい、インターネットで調べてみました。

すると、ある動画でお年寄りが話されていました。「戦争は怖く恐ろしい。ですから私は語り部になっています。これから先、いつまで話ができるかは分からないけれど、歩けなくなっても車椅子に乗ってでも、みんなに戦争の恐さを話していかねければならないと思っています。」この言葉は、私の心に刺さりました。「ごめんなさい。私は戦争を甘く見過ぎていました。」私の心の中にこの言葉が自然に出てきました。車椅子に乗ってまでも語らなくてはならないほど、実際の戦争はこわいもの。だから、若い人たちにどうしても伝えなければいけないというお年寄りの強い使命感をひしひしと感じました。

別の視点から八月十五日を調べてみました。戦争に関係した他の国の八月十五日です。すると、韓国にとっての八月十五日は、「独立記念日」と言うのだと分かりました。韓国が日本の植民地支配から解放され、国として独立した記念日なのだと知りました。「光復節」とも呼ばれ、失われた光を取り戻し、失った国権を回復する日として八月十五日を祝日としているのだと知りました。

中国は、九月三日を「中国人民抗日戦争勝利記念日」としています。中国が日本と戦争をして完全な勝利を収めたことを記念した日にして、いることが分かりました。

日本に支配されていた韓国。日本と戦った中国。どちらの国も日本に対するイメージがよくない理由が分かった気がします。日本は戦争が「終わった日」。韓国は日本から「独立した日」。そして中国は日本に戦争で「勝利した日」。八月十五日に特別なそれぞれの思いを抱いていることが分かりました。

それぞれの国で、戦争が終わった日に対する「思い」が違って、いるように見えますが、私には共通している点が見えてきます。それは、戦争が終わった後のどうすればいいのか分からない不安。たくさんの人を亡くした悲しみ。元の生活は戻らない悔しさ。そして、一番の思いは相手国への憎しみです。

戦争をすると、勝ち負けができてしまいます。でも、それは結果です。戦争をすれば、たくさんのお人の命が失われた事実があります。それは独立した、勝ったといえるのでしょうか。疑問に思います。戦争は「独立」「勝利」だけでは伝わらないことがあります。想像できないくらいたくさんのお人の犠牲の上の独立であり、勝利なのです。本当にそんなにも多くの人の犠牲が必要だったのか、戦争が必要だったのか、そこを考えたと思います。国どうして話し合い、平和にする方法を考えることがどうしてできなかったのでしょうか。過去を憎しみ合うより、一緒に平和について考えたいのです。それはとても難しいことですが、戦争するよりずっと良いことです。

八月十五日が世界中の人にとって何が大切なことであるかに気付ける記念日になりますように。「おめでとう」と笑顔で言える日になりますように。

二度目の悲劇を 起こさないためには

第一中学校 三年

赤池孝太

ロシアによるウクライナ侵攻によって問題視されていることは何だろうか。それは数多くあるが、その内でも捕虜についての問題を聞いたことがあるだろうか。それはロシア軍がウクライナ軍女性兵士を虐待していたというものだ。しかし捕虜の処遇を巡った問題は何もロシア側だけではない。ウクライナ側も捕虜のロシア兵の個人情報を知ったり、ロシア兵を脅し、その様子をSNSで公開していたりしていた。これらは、どちらも許してはいけない行為だ。

しかし、こういった捕虜に対する問題は今に始まったことではない。第二次世界大戦の日本でも捕虜の問題は起きていた。そして遠藤周作が『海と毒薬』という本で、この日本での事件をモデルにして小説を書いている。これもまた捕虜の処遇に関するものだ。だがこれはロシアやウクライナによる問題とは比にならないほど残酷である。なぜな

ら、捕虜を実験台として生体解剖という恐ろしいことをしていたからである。物語の主人公である勝呂はこの生体解剖への参加を承諾した。勝呂が承諾したアメリカ兵捕虜の生体解剖だがこれは今行われているロシアによるウクライナ侵攻によって双方どちらかが捕虜として兵を捕らえても、それは行わないはずだ。さらに今の日本でも同様にそれを行おうとする者は、いないだろう。

こういった捕虜の待遇については条約によって定められている。その条約のことをジュネーブ条約という。この条約は一九四九年に締結された。条約には、もはや戦闘に直接参加することができない人、つまり捕虜を保護するというのが示されている。しかし、捕虜の扱いや権利が守られるようになってからまだ約七十年しか経っていない。このことから、それらの条約で捕虜が守られるまでにはとても長い歳月を要したということが分かる。

『海と毒薬』のモデルとなった事件は九州大学生体解剖事件という。これは、一九四五年に起きた事件である。場所は九州帝国大学医学部。そこで、外科医らはアメリカ兵捕虜らに、実験手術を施し、全員を死亡させた。ここで捕虜となっていたアメリカ兵は、熊本、大分両県境に墜落した米軍機B29搭乗員全八名である。実験手術の内容としては片肺を切除して生きられるか。また海水は代用血液として有効かどうかなどの確認が目的だったとされている。そして敗戦後には日本軍将校や九大教授ら三十人が戦争犯罪人として起訴され、二十三人が有罪を宣告された。そのうち五人は、絞首刑を宣告されたが後に恩赦により減刑されたため死刑となった人はいない。

ではなぜ生体解剖などという恐ろしい出来事が起きたのか。それはやはり、人がどれだけ追い込まれていたかどうかだろう。今回のウクライナとロシアの戦争捕虜問題でもそうだ。戦争でいつ自分が死ぬか分からないという極限の不安に追い込まれていたからこそ捕虜への対応を誤ったはずだ。そして小説の主人公勝呂もまた、心身共に疲弊し切っていたため、選択を誤った。人は追い込まれると冷静になり判断することが難しい。実際に生体解剖が行われた時は、戦争真っ只中だ。それこそ正しい判断は下せないだろう。

ではどのようにしたら、冷静さを保ち、正しい判断を下すことができるのだろうか。そのための対策として今の現状を俯瞰ふかんするということが大切だろう。例えば、今は戦争状況という異常な状態だ。そのため、国際社会の視点から自分の国の状況や自分の行為を俯瞰してみることに大切だろう。このように、今いるところから一歩引いてから見てもいいだろう。このように効果はあるだろう。そうして再びこのような悲劇が起きないように、過去の出来事と向き合い、それを後世に正しく伝えていくことが大切なのではないか。

対岸の瓦礫れき

第二中学校 二年

小松 桜子

広がる黒煙 鉛色の雲

激しく爆はぜる火花と

夜を昼のように照らす猛火

そのさきで

燃えながら 崩れていく 建物たち

周りを囲んでいたものはなくなり

残ったのは

かつて 建物であった瓦礫れきの山

たくさんの明るい色が消えてしまった

あの朗らかな面影は

私の好きだった 温かさ

どこにいつてしまったの？

衝撃だった

それを見たのは昔の記録映像

教科書の端 白黒の画面だったけれど

小さな頃にテレビで知った戦争
今でも心の中に 残っている

自分の周りはどうだろう

景色が変わるほどの大きな争いも無い
色が消えてしまうほどの悲しみも無い

家族 友達 先生 近所の人たちと
変わりなく

私は 一緒に過ごさせている

温かいお風呂も ご飯も

いつも私の目の前にある

当たり前だと思っていることは

平和だからできること

感謝しなくてはいけない

今の平和は

今日までに積み上がってきた

感謝しなくてはいけない

これからもずっと

平和と戦争と本当の強さ

第二中学校 三年

里村 駿

八月六日。今年も広島で行われた平和記念式典の様子がテレビで放送されていました。

小学生の代表二名が発信した「平和への誓い」を聞く中で、あの悲惨な原爆投下から七十七年経ったこと、そして今もどこかで行われている戦争で日常が奪われている人々が世界にはいることを、改めて考えさせられました。考えているうちに去年国語で学習した『壁に残された伝言』を思い出しました。

あの時、私は「戦争」と「平和」について、言葉の意味を正しく知るために辞書で調べました。「戦争」とは「国家間で、互いに自国の意志を相手国に強制するために、武力を用いて争うこと」、「平和」とは「戦争や暴力で社会が乱れていない状態のこと」とありました。この二つの言葉は真逆にあるものということを感じることができました。どちらかを選ぶとしたら誰が考えても「平和」がいいし、今ある平和を維持し続けるためには、まずは相反する「戦争」を知ることだと思い、広島原爆について調べることにしました。

昭和二十年、アメリカ合衆国が広島市に対して世界で初めて原子爆弾「リトルボーイ」を実戦使用した出来事です。これは、人類史上初

の都市に対する核攻撃であり、当時の広島市の人口の約四十七%が投下四か月以内に死亡したとされています。今も、戦争の怖さが分かる原爆ドームや島病院跡もすっかりと残されています。そして、「兄が死ぬより、わしが死んだ方がよかった」などと、大切な人が亡くなった悲しみと、生き延びた者の苦しみには終わりがありません。心に深く傷を負った被爆者は、それでも前を向き「僕ら若人の力によって、きっと平和な世界を築き上げてみせる」と決意を見せました。悲しみや苦しみを抱えながらも、被爆者の方々は生きることを決して諦めず、共に支え合い、広島町の復興に向け立ち上がりました。広島の人々は絶望しても、後ろは振り向かず、つねに前に前にと突き進むことができる。とても驚異的なことだと感じました。

私は、日本の平和を継続し続けるためにはまずは、戦争の怖さを知ることが大切であると考えます。今は、テレビや学校の行事、インターネットなど知るための手段は多くあると思います。そこからどうやって伝え広めていくのかを考える必要があると思います。語り部の生の声を聞くのも一つの手段です。もう高齢となった語り部の言葉を今ならまだ聞くことができ、引き継ぎ、伝えていくことが可能です。こういったことをもとに、今よりもっと、戦争について考えることが大切です。

戦争は、国と国とが武力を用いて、戦い、力で相手国を強制します。ですがそれでは、自分が良くても相手が納得していないのは明白です。どちらも納得し合い、武力で解決しない方法を探すことが大切です。子どもである私たちができることは、無いかもしれませんが、しかし、

相手のことを思いやる方向へと意識が変われば、きっと平和に近づけます。「自分だけでなく」が大切なことだと思いました。

今年の「平和への誓い」の中にもありましたが、「本当の強さとは、違いを認め、相手を理解しようとする事」であると考えるときまさに、私たち若者の意識が少しずつ変わっていき、大人になった将来、相手のことを考えられる本当の強さをもてば、戦争は起こらないのではないのでしょうか。未来は創ることができます。まずは、私自身から行動を起こしていくことが大切だと考えます。

平和のバトン

第二中学校 三年

村田 悠 騎

ある夏休みの午前中、甲子園を見ていると、ぱっと映像が切り替わり、なにかのセレモニーのようなものが行われている映像が映しだされました。僕は不思議に思い、カレンダーに目を向けるとその日は八月九日でした。そう、長崎に原子爆弾が投下された日だと僕はその映像を見るまで全然気が付かなかったのです。

終戦から今年で七十七年、その時を生きていた人々の記憶は失われつつあり、何事もない「平和な日々」があたりまえのようになってきています。しかし今、戦争をしている国もあり、日本もいつそうなる

か分かりません。先人の築いた平和でなによりも尊いこの日々を守るために、戦争を体験した人がいなくなってしまう前に、この時を生きる僕たちが当時の記憶や戦争の恐怖、悲惨さの話を聞いたり、調べたりして「平和のバトン」を僕たちの子ども、そして孫の世代まで繋げていかなければなりません。

本当は実際に体験した人のお話を聞きたかったのですが、僕の身近な人の中に戦争を体験した人はいません、そのためまず当時の生活のようすについて調べてみました。当時の日本はとても貧しく、服装は決められ、女子はモンペに自家製の下駄やぞうり、男子は学生服に金属類が不足していたため、木や陶器のボタンをつけていたそうです。そして食料も不足していたため、普通は捨てられるものを工夫して食べていました。例えば、みかんの皮やトウモロコシの芯、キャベツの芯、さらにかぼちゃの種やすいかの種を食べていたそうです。食糧不足や物資不足の問題だけでなく、敵国からの空襲という問題もあり、市民の日常はことごとく奪われ、今の日本では考えられない生活を送っているという命が失われるかも分からず、実際に亡くなった方も多かったそうです。

次にその調べたことをどのようにして伝えていく方法があるかを考えてみました。考えてみると主に三つの方法が思い浮かびました。順番に「学校の授業などで教育する方法」、「インターネットなどを活用してデータをのこす方法」、そして最後に「戦争に関連する映画やドラマやアニメを通じて伝えていく方法」が思い浮かびました。僕はこの三つの方法の中で三つめの「戦争に関連する映画やドラマやアニメを

通じて伝えていく方法」に注目しました。「火垂るの墓」や『この世界の片隅に』などのアニメで当時の様子を目で見て、音で聴いて知ることができ、さらに子どもからお年寄りの方まで、幅広く年代を問わずに気軽に見ることがができます。そして、絵での表現のため外国の方でも理解しやすいと思います。そのため、この方法は、この時代に合った伝え方だと考えました。

これからの時代は、その世代、その世代に合わせて、テレビなどのメディアやインターネットなどを活用して、戦争を経験し、当時を生きていた人々の思いを伝えていくべきだと思います。そして一番大切なことは自分から戦争について学ぼうとすることです。自分から学ぶことで教えられるときよりも深く考えることができ、さらに記憶にのこります。

二度と戦争によって「平和な日々」が失われないようにするために、戦争の恐怖、悲惨さを学び、考え、「平和のバトン」を次の世代に繋げる準備をしてみてもいいでしょうか。

平和な世の中とは

第三中学校 三年

渡 邊 日 和

今、世界では戦争が起きている。私たちが温かい布団で安心して寝

ているとき。冷たい場所で、いつ命を奪われるか息を潜めて待つことしかできない人がいる。私たちが、家族と楽しく食事をしているとき、自分の家族を探しながら、歩き続けることしかできない人がいる。私は、このような状況に置かれている人々を、一人でも多く救いたいです。この問題を解決する一番の近道は、戦争をやめること。世界中の誰もが望んでいることだと思います。それにも関わらず、なぜ世界からは戦争がなくならないのでしょうか。この作文を書く機会に、今世界で注目されている、ウクライナとロシアの戦争について考えてみました。

この戦争は、二〇二二年二月二十四日から始まりました。ニュースを見ていた中で、この戦争が起きる前までは、

(私が生まれた時代は戦争もなく、平和で良かった。)

と思っていました。しかし、ある日テレビをつけてみると、そこには歴史の教科書だけで見えたことのなかった写真が、映像として放送されていたのです。私は、こんなことが世界で行われていたなんて、全く知りませんでした。次の日も、また次の日も、楽しく見ていた番組は、ほとんどが戦争についての内容になっていました。

(どうしてこんな戦争が始まってしまったのか。)

私はいつも不思議に思います。なぜ話し合いでは解決しないのか。解決方法は、武力しかないのか。それなら、武器というものを初めから作らなければ良かったと思います。しかし、今までの人は生きていく上で、自分自身を守るものは必要だったと思います。けれど、それを人に向けることは間違っています。

ロシアは、核保有国です。世界で最も多くの核を持つ国です。それではなぜ、アメリカをはじめ多くの国々はこの戦争に軍隊を送らないのか。それは、戦いが激しくなり、核戦争に発展することを恐れているからです。だから、戦争を止めたくても止められないのです。ロシアのように、核を持つことが自国を守ることに繋がると考える国が増えれば、世界はさらに危険な状態になります。ウクライナがこの戦争で失ったものは大きいのです。多くの命や、多くの都市。これからも、戦争が続いていく上で失うものは増えていくと思います。

しかし、長い目で見れば、ロシアの方がウクライナ以上に失うものは大きいかもしれません。ロシアは、政治的にも経済的にも、国際社会から孤立しつつあります。この先も、国は貧しくなり、国内でも混乱する可能性が高くなると思います。

軍事力を使い、無理やり言うことをきかせようとすることは、国際ルールを破っています。現段階では、欧米の国々は協力してロシアとの貿易、お金のやりとりをやめて、経済的に孤立させることで攻撃をやめさせようとしています。そこまでしないと、戦争を止めさせることはできません。そこまでしてでも戦争は止めさせなければいけないのです。

間違った争いをやめ、武力ではなく言葉で和解し合える平和な世の中を、早く実現させたいです。

人を変えてしまうもの

第四中学校 一年

久保田 陽菜璃

家があり、家族や友達がいてお腹いっぱいにご飯を食べることができ、学校にも通えて夜は静かに眠りにつくことができる。それが私にとっての当たり前前の日常です。

でも、今から約八十年前は太平洋戦争の真っ最中でした。家も焼かれ、十分な食べ物もなく空襲で安心して眠ることもできません。その中でも懸命に生き延びた人々の気持ちを知らるため、私はあるテレビ番組を見ました。

一番印象に残ったのは、一九四五年三月、白梅学徒隊に入った当時十六歳の女性のお話です。白梅学徒隊とは、沖繩戦で従軍看護婦として活やくした方たちのことです。壕ごうと呼ばれる野戦病院で負傷した日本軍の手当てをします。手当てといっても傷口に集まったうじ虫を取り除いたり、消毒したりすることしかできません。また、くさってしまったり手足を麻酔無しでのこぎりを使って切断します。昼は海からの砲弾、空からの銃撃があるため切断した手足は夜に外へ捨てに行きま

す。そんな日々が二か月間ずっと続き、最初に抱えていた戦争に対する恐怖や不安、処置に対する恐ろしさは次第に慣れて感じなくなっていくそうです。

また、生後二日で母親を銃で撃たれ失ってしまった人、目の前で自分の家族や友人が空襲の被害に遭っているのを目撃した人、朝、挨拶を交わした人におかえりを言えなくなってしまう人など戦争が生み出した悲惨な光景が目に見えつきました。

終戦後も人々の苦しみは続きました。それは放射能によるものです。放射能を浴びてしまうと「被爆者」と言われ差別や偏見が絶えません。体だけでなく心にも深くできた傷は一生残り、今もなお苦しんでいます。味方である日本人から差別を受けているという現状が一番悲しいことだと思いました。また、負けてしまった日本だけでなく勝った他国にも家族や友人、同じ命があります。そのことを七十七年前でも理解していたはずなのに戦争を続けたこと、今もなお命と向き合おうとせず争いを続けている国があるというのに憤りを感じます。

私はなぜ現在も過去のような戦争をくり返さなくてはいけないのか、争い合っても残るのは人々の悲しい気持ちだけなのに同じことをしてしまうのか本当に疑問です。現在も行われている争いに対して、多くの国々が支援や制裁を与えようとしています、それが正しいことなのか私には分かりません。ですが、命を奪う行為はやめるべきだと思います。

戦争で悲しむ人がいなくなる日を望むだけでなく、戦争とは人としての大切な感情を狂わせてしまう恐ろしいものだとすることを多くの人に伝えていきたいと思います。

戦争と平和について

第五中学校 二年

菅野麻理

私は、平和とは争いがなくみんなが幸せに暮らせることだと思えます。世界中の人たちみんなが平和に暮らせるには戦争がなくならないといけないと思います。

国語の授業で広島県に落ちた原子爆弾について勉強しました。八月六日午前八時十五分人類史上初めて、広島に原子爆弾が落とされました。爆心地から二キロメートル以内の建物をほとんどすべて破壊し焼き尽くしました。この日、広島には約三十五万人の人がいました。そのうち約十四万人が原子爆弾によって亡くなりました。また原子爆弾の特徴は、通常の爆弾では発生しない大量の放射線が放出されます。それによって人体に深刻な障害を残します。その放射線が年月を経て引き起こす影響などで苦しんだ人がたくさんいるということが分かりました。私が思っている以上にたくさんの方が亡くなっていてやっぱり戦争は起きてはいけないことなのだと思います。

また、広島原子爆弾について調べたあと、『はだしのゲン』という映画を見ました。このお話は、原爆が落ちてくるときのお話です。このときはお腹が空いていてもがまんして、空襲警報が鳴るたびに防空壕ごうに入っていたりして、ものすごい大変な生活をしてたということ

が分かりました。思っていた以上に苦しい生活をしていました。

また、赤紙とよばれる召集令状がくると戦争に行かないといけません。私のひいおじいちゃんも召集令状がきて戦争に行きました。この紙は十七歳から四十歳の人たちにきます。十七歳の高校二年生まで戦争に行く聞いてびっくりしました。ひいおじいちゃんも戦争に行つたときはまだ十代だったそうです。整備工ということもあり無事帰つてくることができました。私のひいおじいちゃんは生きて帰つてこれたけれど家族を戦争で亡くした人もたくさんいます。戦争は、自分が行きたくなくても、国のために戦いに行かないといけません。たくさんの方が亡くなって色々な人が苦しんだ戦争はこれからも絶対に起きてはいけないものだと思います。また最初から戦うのではなくて解決するまで話し合えばいいと思います。そうすればたくさんの方が亡くならなくてすんだかもしれません。

今もロシアとウクライナが戦争を続けています。私には、戦争を止める力はありません。けれどこれから一つでも多くの戦争がなくなるように一人一人が争いを起こさないように意識することが大事だなと思います。また戦争はなぜしてはいけないのか、戦争をすることでどういうことになるのかを伝えていくことも大事だと思います。

私が戦争に直接関わることは無理だけれど一つでも多くの争いがないことになること、そしてみんなが平和で幸せに暮らせる世界になることを祈っています。

小さなことから始める平和

第五中学校 三年

上原 梯 梧

みなさんは今年が何の年か知っていますか。今年、沖縄返還五十年です。今から五十年前の一九七二年まで沖縄県はアメリカの統治下にありました。その頃は、沖縄県と本土を往来するのにパスポートが必要だったそうです。

この夏休みに僕は沖縄県に帰省しました。そこで祖父から沖縄県営平和祈念公園の話を聞きました。第二次世界大戦中に行われた沖縄戦で戦死した僕の高祖父と曾祖父の兄弟の名前が、平和の礎^{いしじ}という戦没者の名前が刻まれている石碑に記されているのです。初めて聞いた話だったので驚きました。僕は早速、平和祈念公園に足を運びました。

まず、僕は平和祈念資料館で沖縄戦についての展示を見ました。資料館に入ると最初に目に飛び込んでくるのは数々の写真でした。その写真たちは沖縄戦の状況を生々しく語りかけてくるものでした。その次には体験者の話を聞きました。体験者の話は当時の様子を鮮明に物語っていました。僕は、それらの展示を見て、あまりのむごたらしさに衝撃を受けました。

では、沖縄戦はどのようなものだったのでしょうか。沖縄戦は史上

最悪の地上戦と言われています。その理由としてあげられるのが、戦死者の多さです。陸軍六万七千九百人、海軍一万二千二百八十一人、その他を含め、計約八万九千四百人で、一般住民の死者は十万人、十五万人にも上るとされています。戦前の沖縄県の人口は約四十九万人で、戦争で亡くなった方が約十二万人です。これは沖縄県民の四人に一人が亡くなったこととなります。軍の人だけでなく、一般住民も犠牲になっていて、むしろ一般住民の方が軍の人よりも亡くなった人が多いという事実が驚きました。

そして、何よりも驚いたのが集団自決が死因の方が多いということです。集団自決とは強制集団死のことです。米軍に捕まると無残な目に遭ってしまうという恐怖心が沖縄の住民の心に植え付けられていて、自ら命を絶つこと以外の方法を奪われていたそうです。

僕は、突然やってきたアメリカ軍に大量虐殺され、心に恐怖を植え付けられて最終的には集団自決という道を選んできました住民のことを思うと心が痛みます。

また、アメリカ軍との戦力差はとてつもなく大きかったそうです。沖縄戦に参加したアメリカ兵は約五十四万人に上りそのうち十八万三千人が上陸したのに対し、日本兵は十一万人だったそうです。しかも、その日本兵のうち二万数千人は沖縄で集めた防衛隊や学徒隊でした。これは、僕と同じくらいの十四〜十六歳の学生だったそうなので、自分だったらと思うとぞっとします。

そして、今の世界は、このような戦争を体験しているのにも関わらず、昔と何も変わっていないと思いました。それは、ロシアとウクラ

イナの戦争です。ウクライナでも沖縄戦のようにむごいことが行われていると聞きます。沖縄戦のようなひどい戦争が今現在も身近なところで起こっているということです。戦争は昔の出来事や、世界のどこかで起こっている自分とは関係のないものではなく、一人ひとりが考えなくてはならない世界共通の課題だと思いました。

最後に、僕は平和の礎いしに刻まれている沖縄戦で戦死した高祖父と曾祖父の兄弟の名前を、そして他のおびただしい数の名前を見ました。それを見て、僕はこの人たちの死を無駄にしてはいけないと感じました。

みなさんは平和についてどのように思いますか。一人ひとりが平和について関心を持つことで世界が変わるのではないのでしょうか。

平和の詩から考える

第五中学校 三年

大石多恵

夏休みのある日、新聞の表面に大きく取り上げられている記事が目にとまった。沖縄の慰霊の日が書かれ、追悼式典の様子が載っていた。読んでいる途中で祖父が来て、

「もう沖縄戦から七十七年もたっているのか。」
とつぶやき悲しそうな顔をして寢室に戻っていった。

その後、私は大きく載った少女の写真を見た。今回の追悼式典で「平和の詩」を読んだ、徳元穂菜とくもとほのなさんだ。彼女は小学校二年生で戦争の大きな絵を見て「こわい」と悲しい気持ちになったことを詩に表したそう。その詩の抜粋が写真の横に載っていたので読んでみた。「へいわをポケットに入れて、絶対落とさないように、なくさないように、忘れないように持っておく。」詩の中で彼女は平和をそう表現していた。

私はこの詩を読んでたくさんを感じた。平和は言葉や思いだけでは成し遂げられないこと。心というポケットの中に、ずっと落とさないように、なくさないように、忘れないように持つておくこと。そして、平和についてずっと考え続けていくこと。たくさんのお話を聞いたと同時に、自分の中の平和に対しての見方が大きく変わった。

私はこの詩と出会うまでずっと、戦争をやめたり、兵器をなくしたりすればすぐに平和になると思っていた。でも、詩を読んだことで、（それは違うのかもしれない。）と思うようになった。たとえ戦争が終わったとしても、たとえ兵器が世界からなくなったとしても、すぐにまた争いが起きたり、また兵器がつくられてしまう。私は、「最悪な事態」を止めることができる原動力が「平和」なのではないかと思った。

現在、世界では戦争や痛ましい事件が絶えない。個人で反戦を訴えたり、多くの国が声明を出すなど、世界中で「平和」という言葉が飛び交っている。しかし、それらの訴えもむなしく、今日も戦争の犠牲者が世界のどこかで出てしまっている。特にウクライナではロシアとの間で戦争が起き、連日戦争関連の報道が止まない。私たちが住む日本は今のところ被害も襲撃もないが、平和が世界で脅やかされている

状況だ。

私たちは平和をつかむために、そして平和な世界にするために、何ができるのだろうか。

私が考えたのは、「平和」について考えたり、思ったりするだけではなく、「学ぶこと」が必要だ、ということだ。

私は前述したように、争いをなくしたり、兵器をなくせばすぐに平和になると思っていた。でも、そんな簡単な考え方で平和は成し遂げられるものではないことが分かってきた。それまで平和へのしつかりとした正しい知識がなかったから、軽い考えで済ましてしまっていたのだ。

だから、私はみんなに伝えたい。平和を学ぶということは、一筋縄ではいかない。ちよつと辛い部分があるのかもしれない。学ぶ過程で怖い写真や、見るのが辛い映像も見られるかもしれない。でももし、知ることができれば機会があなたにあるのなら、そこで本当の平和の意義について学ぶべきだと思う。きつと自分が知らなかったことが分かるはずだ。私もこれまで以上に平和学習に取り組もうと思う。

「おやすみ。」記事を読むのに夢中で、寝る時間が来ているのも忘れていた。私は両親と記事で見つけたこと、「平和の詩」で感じたことを話してから自分の部屋に戻った。一通りじっくり記事を読んだ私は、布団の中に入ってもなかなか眠りにつくことができなかった。真剣なまなざしで「平和の詩」を読んでいる徳元さんの姿が頭から離れなかった。

「当たり前前の日常」を守るために

金岡中学校 一年

植 栢 小 都

「これからも一日一善を心がけようと思う。」

これは、一九四五年八月五日に、中学一年生の少女が日記に書き残した言葉だ。彼女は、翌八月六日、広島に落とされた原子爆弾によって、亡くなってしまった。

私は先日、NHKの『原爆が奪った未来〜中学生八千人・生と死の記録〜』というテレビ番組を見た。その番組では、広島で、空襲時に火の広がりをおさえるために木造の建物をとりこわす「建物疎開」に動員された中学一年生八千人が被爆し、そのうち六千人の命が奪われた、という内容が取り上げられていた。

冒頭で取り上げた日記を書いた少女も、その六千人のうちの一人だった。爆心地に近い場所で仲間と作業していた時に被爆し、命を落としたのだ。私と同じ、中学一年生という若さで。

彼女が同年の四月に書いた日記には、憧れの女学生になれた喜びと、これから勉強を頑張る、という決意が記されていた。建物疎開が始まってからも、日記には何気ない楽しそうな日常がつつられていた。原爆投下の前日まで。

きつと彼女は、初めて女学校の制服に袖を通した時、自分が四か月後に亡くなってしまふだなんて、想像もしていなかっただろう。彼女だけではない。命を奪われた他の多くの中学生たちも、それぞれ自分の日常を楽しみ、自分なりの目標や希望があっただろう。

それなのに、原爆は、一瞬にして奪ってしまった。命も、日常も、未来も、希望も。

私だったらどうだろう。私にとって「当たり前前の日常」とは、学校に行き、授業を受け、友達と話し、部活を頑張る、楽しむ。家に帰ると家族がいて、私はご飯を食べ、宿題をし、趣味を楽しみ、そして寝る。ありふれているけれど、刺激的で楽しく、幸せな毎日。一緒に過ごしている家族、友達、先輩、先生。そうだったことだ。でも、それが奪われてしまったら、どうだろう。悲しいなんてレベルではない。辛いなんて言葉では軽すぎる。想像もできない。

でも、戦争は、その、悲しい、辛いなんてレベルではないことを引き起こした。しかも全ての人に。亡くなってしまった人はもちろん、生き残った人にも。

戦争は、人々の命を、日常を、大切な人を、未来を奪い、人々に想像もつかないような苦しみを与える。どんな理由があろうと、戦争はあつてはならないし、もう二度とくり返してはいけない。

しかし、今でも世界では戦争が起こっている。その戦争によって、今も誰かの命が、日常が、未来が奪われている。戦争を始めた側にも理由があるのかもしれないが、罪のない人たちの命を奪い、日常をこわすのに値するほどのことだろうか。

そして今、世界では核の脅威が高まっている。核兵器、それは一瞬にして多くの人の命を奪ってしまうものだ。そんなものがあつたら、広島と長崎であつたことがくり返されてしまうかもしれない。

私は、日本も「核兵器禁止条約」の締約国になってほしいと思つている。核兵器禁止条約は、核兵器の開発や使用を禁止するものだが、核保有国や日本は参加していない。日本は唯一の被爆国なのだから、核兵器の恐ろしさを世界に伝え、非核化をリードしていかなければならないと考えている。そしてゆくゆくは、全ての国がこの条約に参加し、世界中で核廃絶が実現されてほしいと心から思っている。

そのために、私たち若い世代にできることは、戦争の愚かしさを学び、知り、後世へと伝えていくことだと思う。忘れてしまったら、歴史はくり返されてしまうから。戦争の記憶を風化させないこと、これは私たちに課された使命のうちのひとつだと考える。それから私は、自分が、「当たり前前の日常」を過ごせることができていることに感謝しながら生きていこうと思う。

戦争がない平和な場所だからこそ過ごせる「当たり前前の日常」。この、当たり前前の日常が過ごせる場所が世界中に広がってほしいと、私は願っている。

繋ぐつな

金岡中学校 二年

田邊夏野

私は幼いころから祖母の家に預けられている。私の祖母は同じ夢の話を何度もする。その夢は祖母の実家にある「柿田の久保田さん」と呼んでいる仏さまが出てくる話だ。「柿田の久保田さん」とは、今は亡き私の曾祖父が、空襲を受けて焼けている静浦の本能寺に、ご本尊を助け出しに行ったとき、持ち出すことができなかつた仏さまだ。後になつて曾祖父が身延山にお参りした際に、よく似た木彫りの仏さまがあつたため、買ってきたもので、現在も祖母の実家にある。その「柿田の久保田さん」は、たまに祖母の夢に出て、いろいろなことを言うというのだ。なんとも不思議な話である。

その本能寺に祖母と母と私の三世代でお墓参りに行く。そのお墓の奥の方には細長く掘られている穴がある。そこは戦時中に使つた防空壕くわうくわうの跡だと祖母から聞いた。本能寺には戦争の頃、東京都北区滝の川小学校の生徒が、東京にいては危ないので親元を離れて疎開をしてたそうだ。祖母の父親、私の曾祖父はその時、住職と一緒に寺にいた子供たちのお世話をしていた。夕方になると親を思い出し、東の方を見て泣いていた子もいたらしい。その後、沼津も危ないとなり、その子たちは他の安全なところに疎開したそうだ。祖母が大人になり戦争

が終わつたころ、そのときの東京の子供たちが「沼津会」という会を作り、毎年、本能寺のある獅子浜へ来て、昔のことを懐かしんだと聞いた。戦争という出来事に直面し、幼い子供にもいろいろな負担がかかつていたのだと思うと、戦争に行かなくても、戦争というものに巻き込まれていると思つた。

去年亡くなつた祖父の父親、私の曾祖父も戦争体験者だ。曾祖父は祖父が二歳から十歳まで日本にいなかったそうだ。初めは満州鉄道の職員として異国に渡つたが、終戦の一九四五年以降シベリアのチタといるところで捕虜になつていたそうだ。だから、祖父は父親が帰ってくるまで、もう父親は死んでしまつて、いないと思つていた。現在続く、ロシアとウクライナの戦争。そこでは赤ちゃんから高齢者までたくさんの人が亡くなり、インフラが壊されて、水も赤ちゃん用のおむつも無いところで出産することもあるとニュースで報道されていた。今の日本では考えられないことが現実にも今、起きている。今、私が作文を書いている最中も、どこかで苦しんでいる人がいるということを、私は現実として受け止めることができない。よその国では、残酷なことが起きていることを、日本にいて平和な私はどうしても実感できない。先日、テレビで、ラップフィルムが戦争のために開発されたものであることを知つた。戦争中は銃弾を湿気から守るために使われていたそうだ。現在では、ラップフィルムは食品を保存したり小分けにしたりにするのに使われ、なくてはならない物の一つだ。科学が発達することとは良いことだ。そのことで便利になつたり幸せになつたりすることもある。ラップフィルムが今使用されている用途で最初から発明され

ていたら、どんなに良かったらと思う。3Dプリンターも自分が作りたいものをすぐに形にできて便利だが、ロシアとウクライナの戦争で銃を製造するために使われては、せっかくの発明が台無しだ。科学の発展も兵器などではなく人々が幸せになるために使ってほしい。戦争では当然、人がたくさん死ぬ。それは亡くなった人にとっても、残された家族にとっても本来、生きるはずだった人生をまっとうした死ではないと私は思う。

昨年、祖父が亡くなった。こうして、戦時中に生きていた人は少なくなっていく、その当時に語れる人は減っていく。祖母がしてくれた話も祖母が自分の父母や祖父の父から話を聞き、母も祖母から話を聞き、私は祖母や母から話を聞いた。次々と語ることが出来る人が減っていく中で、こうして話を聞くこと、それを次の世代に伝えることが、過去に生きていた人の生きざまを伝えることができる方法だと思う。未来に戦争をなくすためにも、私が語り継がれたことを、将来自分の子供に繋いでいかなければならないと思っている。

先人たちの願いと想い

金岡中学校 三年

勝 又 健 太

日本の真珠湾攻撃で始まった、史上最悪と呼ばれた太平洋戦争。た

くさんの人が命を落とし、経済もまわらず不況となった。あの戦争が終結し、七十七年が経ち今に至るが、未だ戦争はなくなりません。時が経つにつれ、戦争経験者は減っていく、戦争を語る者は少なくなっている。そのような中で、僕は以前聞いた貴重な体験談が今でも忘れられず、心の内に染みついている。

今から約三年前、僕が小学六年生の時の夏休み、学校の体験行事として、子育て分野と介護分野の二つに分かれ職場体験をした。僕は介護分野を選び、デイサービスなどをやっている介護施設で体験をさせてもらった。年齢層は幅広く、六十歳以上が基本だった。僕が非常に驚いたのは、最高齢の方で、大正生まれの百歳近くの方がいらっしゃったことだ。色々な体験をしたが、中でも一番貴重だったのは、生まれた時から沼津にずっと暮らしている戦中生まれのおじいさんに話をうかがったことだった。昔の沼津の様子や学校のこと、政治についてだけでなく、戦争の話もした。話をしているうちにおじいさんが衝撃的な一言を言った。

「私はね、終戦直前で召集令状をもらい、戦場に行けなかったんだよ。」と。するとおじいさんは、おもむろに車いすを動かし、自分の部屋から手帳を持ってくると、その召集令状、通称「赤紙」と呼ばれるものを実物を見せてくれた。しかし、その赤紙は歴史を物語るかのように色あせていた。おじいさんの話では、終戦直前で召集されると、本来回収されるはずの令状は回収されないとのことだった。この赤紙が戦争をなくすための材料として残り次世代へ語り継がれることを願う。

もう一人、戦争経験者の方の話をうかがうことができた。その人も

男性で、十八歳の時に戦地に出征したという。

「戦争はあかんよ。仲間はみんな死んじまう。一人残され戦うのがどれだけ苦しいか。無事に帰ってきたと思つたら町はひどいありさま。

うちの家族は空爆で死んじまった。それなのに、周りの人には『非国民だ！非国民だ！』なんて……苦しかったよなあ……。」

涙ながらに語った言葉には、一つ一つ重みがあった。最後の「苦しかったよなあ……。」は、苦しさ、悲しさだけでなく悔しさや怒りなどがごちゃ混ぜになっていて、心にぐっと来るものがあつた。二人が口をそろえて言っていたのは「戦争は苦しい。私だけじゃない。みんな苦しい」だつた。改めて、戦争は凄惨きわまりないもの、始めてはいけなしいものだと言つて感じた。

しかしその一方で、二人の話を聞き、戦争は必ず起こつてしまうものだとも思つた。ほとんどの人が避けたいと思つていながら、戦争は絶えず、繰り返される。日本は非核三原則というものが方針として定められているように、戦争を放棄し、平和主義を貫くとされ、戦争に参加することは絶対にならないと思われているが、本当にそうだろうか。どこかの国同士の戦争に巻き込まれる可能性は大いにある。最近歴史の授業で戦時中や戦後のことを学んだ。日本は経済不況のまま戦争に突入し、二度も原爆を落とされた。戦争が終結してもなお、水爆で大きな被害を受けた。集団は、「やられたらやり返す」といった思想で強固になることがある。戦争をしている両国は、どちらも正しいと思つてやってしまうからこそ戦争は起こるのだ。

施設で僕がお話をうかがつた二人目の方は、今は亡くなられてしまつ

たそうだ。僕はあの日、最後にお別れをするとき、

「じゃあね。ありがとうね。またおいでね。君の凛々しい姿を見ると昔の戦友を思い出すよ。」

と言われ、涙が止まらなかつた。僕は、

「ありがとうございます。」

というお礼の言葉に、絶対に戦争を風化させず語り継ごうと決意を込めた。おじいさんたちが語ってくれたのは、苦しみや怒りだけではない。平和への願いなのだ。

「忘れたじゃけ。」

金岡中学校 三年

横山 哲太郎

今年に入って、学校の授業や家族との会話の中で、広島原爆についてよく話しました。僕は、これを機に、原爆について調べてみました。

まず、原子爆弾が広島に落とされたのは、僕が生まれる六十二年前、一九四五年八月六日。ものすごいスピードで地面へと落下した原爆は、落ちたと同時に爆発し、一瞬にして広島全体を暗く包み込みました。また、尋常ではない被害が様々な所で起こりました。家は崩れ、その崩れた瓦礫の下には人が挟まって動けなくなり、多くの人が死亡した

ことが分かりました。まるで地獄絵図だと思いました。僕は一度だけ、原爆ドームや原爆資料館を訪れたことがあります。原爆ドームには、原爆で破壊された当時のまんまの瓦礫が残されていました。その破壊されたドームを見ると、原爆の威力のすさまじさに、僕は言葉が出ませんでした。資料館では、被爆した人のぼろぼろで血が染みついたような衣類や、当時の人々がどのような苦勞をしていたかなどが書かれた展示板などがありました。展示板には、当時の人の忘れられない悲劇の記憶などが細かく書かれていました。その中に僕が強く心を打たれた文がありました。

それは、爆発で肌がただれていて水を欲しがる人に水を与えてはいけないという文章でした。僕は一瞬どういうことかと疑問を持ちましたが、読んでいくと、肌がただれている人は、爆発によって放射能などを浴びて体の水分がなくなってしまうため水分が欲しくなるけれど、もし水を与えてしまつたらその人は、水を飲みたいという欲でかろうじて体が動いているため、欲がなくなり死んでしまうと分かりました。僕は、生きたいという思いの強さと、それが叶わなかった苦しみや痛みに、胸が締めつけられる思いがしました。

僕の母方の祖母は、原爆投下の日、たまたま広島にいた為、原爆に遭つたそうです。曾祖母は、走って橋の方へと逃げ、原爆の爆風が橋の手前で止まつたから助かつたと言っていたそうです。曾祖母は僕が生まれる前に死んでしまいましたが、母は曾祖母に原爆についてたくさん質問したそうです。でも、どんな質問にも、曾祖母は、

「忘れたじゃけ。」

と返してきたそうです。よほど原爆について思い出したくないと思つたのでしょう。その後も、曾祖母は、結局死ぬまでほとんど原爆について話してはくれなかつたそうです。きっと、曾祖母は、自分自身があの時の苦しさを思い出したくないだけではなく、あの恐ろしさを一番よく知っている人間として、みんなに怖い思いをさせない為に言わなかつたのではないかと思いました。

僕は、世界中の一人ひとりが、七十七年前のこの悲劇を胸におき、これからの時代は、誰も辛い思いや苦しいことのない楽しくて明るい国を、そして、様々な国が仲良く共存できる世界を創っていく必要があると思えました。地球上に住んでいる同じ仲間同士、いつか地球が終わるその日まで、みんなが共存できる世界になるという希望と決意を捨てずに、平和のありがたさと難しさを感じながら生きていきたいと思えます。

戦争という言葉

大岡中学校 二年

江原 伊織

あなたは「戦争」についてどのくらい知っていますか。戦争という言葉はニュースや本に出てくるが多く、大勢の人が知っている言葉だと思います。しかし、その言葉を知っていても全てを理解してい

る人はほとんどいないと思います。今の時代、実際に戦争を体験した人が近くにいたり、その人から話を聞いたりしたことのある人はあまり多くないのではないのでしょうか。僕も深くは理解していませんでした。僕が戦争について深く考え始めたきっかけは、ニュースを見ているときにした、親との会話でした。

その頃は、ロシアとウクライナの戦争の話ばかりでした。そんなニュースを見ていた母が、ぼつりとつぶやきました。

「どうして、戦争なんて起きるんだろう。人がたくさん死んでも、誰も得しないのに。」

僕は母が言ったことに驚きました。今まで僕も、戦争をする理由など、考えたことも、聞いたこともなかったからです。僕の身の回りには戦争を体験した人はいません。そのため、僕は今までテレビや学校で戦争の話の聞いたり学んだりすることはあっても、自分とは遠い世界の話だと思っていました。しかし、現在ロシアとウクライナの戦争は続いています。さらにそれだけではなく、世界各地で紛争や過去の戦争でその被害を受け続けている人は、大勢いるということを知りました。

母の一言を聞いたときに、僕は、

「もしかして、もうすぐ自分も戦争に巻き込まれるかもしれない。」
と思いました。今まで日本で戦争は起きないだろう、日本は安全だ、と聞いたことがあります、それは絶対ではありません。戦争はいつでもどこで、誰が巻き込まれても不思議ではないのです。

ロシアとウクライナの戦争は、政府と政府の間で起こった問題を力で解決しようとしたため、軍と軍が今も戦っています。一般人も被害

を受けて、傷を負い、最悪の場合は死んでしまいます。多くの人からしたら、これは自分の知らない間で起きた争いに急に巻き込まれるという、非常に理不尽なものです。そして、これは僕達も同じです。僕達は実際に、政府間で何が起こっているのか直接は分かりません。もしかしたら今、争いが起こり、僕達も巻き込まれるかもしれないのです。そして、大事な人が死んでしまうかもしれません。それは絶対に許されないことだと思います。

日本は昔、戦争をしていたそうです。多くの国と争い、関係ない人を争いに巻き込み、多くの死者を出しました。一九四五年八月十五日、日本は終戦しました。この日から、ようやく誰も争いに巻き込まれることはなくなったのです。

戦争を実際に体験した人は、年々少なくなっています。しかし、戦争は実際に体験した人にしか話れないことや、伝えられない話がたくさんあると思います。

僕は母の何気ない一言で、戦争とは何か、どうして起こるのか、そして戦争をなくすためにどうすることが大事なのかを考えました。この問いは、いくら考えてみても正しい答えはないかもしれません。

僕は、世界で起こっている全ての戦争をなくすことはできないけれど、少しずつ減らしていくことで、いつかはみんなが無関係の争いに巻き込まれなくなると 생각합니다。そのためにも、少しずつ身近な人と戦争について意見を共有し、話し合うことで、戦争に対する理解が深まるようにしていきたいです。それをするだけでも、戦争という言葉の捉え方が大きく変わるでしょう。ぜひ、みなさんもこれを機に戦争

について考えてみてください。

日々の日常が平和の第一歩

大岡中学校 二年

芹澤美穂

「人間爆弾」というものを知っているだろうか。これは、日本海軍が太平洋戦争の末期に開発した特攻兵器、「桜花」である。この兵器は、人の命を部品にしてしまった、残酷な兵器である。

私がこの「人間爆弾」について知ったのは、スマートフォンで動画を見ていたときにオススメにでてきたのがきっかけだった。私はあまりの酷さに言葉が出なかった。しかし、命を張って戦ってくれた人を見逃すことはできず、少しの人でもいいから、このようなことがあったんだと知ってもらいたくこの平和作文を書くことにした。

もし私だったら、自分が死ぬと分かっているながら敵のいる方へ向かうことは絶対にできない。この「桜花」に乗った人達は、どのような気持ちで乗っていたのか。自分の命がなくなると分かっていたのならば、中途半端な気持ちで乗った訳では絶対になかっただろう。

どの国でも、戦争で戦ってくれた兵士には必ず家族がいる。その家族はどのような気持ちで戦争へ送ったのか。兵士はどんな気持ちで戦争へと向かったのか。私には考えられない。

私は、昔こんな辛い経験をした人が大勢いるのに、なぜ同じことを繰り返すのだろうかと思った。戦争のほとんどは国同士の政治的問題が理由となって起こっており、何の関係もない人達が亡くなってしまふ。普通に考えると、すじの通らない話である。それでも、国のために命を張って戦ってくれている人がいる。それを早く、この戦争を引き起こした人が気づいてほしい。そして一秒でも早く、この世界で起こっている戦争が終わってほしいと毎日毎日、祈っている。

私は、昨年も真の平和とは何なのかと考えて作文を書いたが、一つもピンとくるものがなかった。

ある日、私がニュースを見ていると、沖縄全戦没者追悼式が生放送されていた。そのときに、小学二年生の女の子が「平和の詩」を朗読しているところだった。その子は、家族と美術館に行ったとき怖くて悲しい絵を多く見た。それを母親に聞くと、七十七年前の沖縄の絵だと教えてくれた。その絵を見た女の子は、怖い・悲しい・可哀想という気持ちになった。そのときふと、「戦争の反対はなんだだろう。」と思ったそう。それは平和なのか、では平和とは何なのだろうか。それを考えたとき女の子は怖くなり、母親に抱きついた。そうすると、とても温かかったという。ではこれが平和なのか。また別の日、女の子は姉と喧嘩をしてしまった。そのとき、母親が二人の話をしっかりと聞いてくれた。そのおかげで、女の子と姉は仲直りすることができた。ではこれが平和なのかと女の子は思った。女の子は、「怖さを知って平和が分かった」という。そのような内容だった。私はようやく平和が何かかというのを、この話を通して分かるような気がしてきた。平和は、

日常にあるどんな些細なことで、嬉しい・楽しい、という明るい気持ちになれることが平和なのだと思った。しかし、その気持ちがかかるようになるには、反対の暗い気持ちも分からなくてはならない。それは、明るい気持ちしか知らなかったら、どれが明るい気持ちなのかが分からないからである。

私は、平和は明るい気持ちになることというのが分かったから、これからは、人に優しく接し、優しい言葉で話す。これが平和の第一歩になっていくと、私は信じている。

ヒロシマの思いを世界へ

大岡中学校 三年

大野 愛梨香

当時の様子を切り取った様々な写真や展示物、今もそのままの形で残されている原爆ドーム。初めて訪れたヒロシマは、道路の中央に路面電車が走り、観光客の楽しげな話し声がするにぎやかな町だった。私は、七十七年前この地に原子爆弾が投下され、多くの人が亡くなり町が変わり果てたということをどうしても信じられなかった。

私は今まで原爆について特に関心を持たなかった。私の生まれる前の出来事だし、身近に被爆者がいない以上、私にできることはないと思っていた。しかし、中学三年生になり、戦争について学んだり考え

たりすることが多くなった。少しずつ知識を得たことにより、もっと詳しく知りたいという思いが膨らみ、ヒロシマへと向かった。

「広島平和記念資料館」は、ヒロシマの実態を世界に広く知ってもらうため、展示施設を求める声が高まり開館された。被爆直後の町や人々の写真や数々の展示物は原爆の恐ろしさを物語っていた。私は一つの三輪車に目が止まった。真っ黒に焦げてはいるものの、車輪やハンドルははっきりと分かった。持ち主は、三歳ぐらいの小さな子供だろう。私は、一瞬で何の罪もない命が奪われてしまうという現実を目の当たりにした気がした。また、家族を失い、その後ひとりぼっちで苦しんだ原爆孤児と呼ばれる子供が約六千五百人いることを知った。一命は取り留めたものの、大切な親を失った悲しみを抱き、何もかも消えた町が瞳に映る。私は、想像するだけで胸が苦しくなった。原爆孤児たちはその後も、農作業や地引き網、貝掘りなどをして食べ物を確保し、たばこのすいがらを拾ったり、靴磨きをしたりして暮らしていたという。

他にも、一人一人の叫びとともに遺品が展示されてあった。そこには、私の目に映った一つの履歴書があった。書かれた文字が今もはっきりと残っていることに、私は驚いた。この履歴書は出されることなく、書いた人は亡くなってしまったそうだ。若者が持っていた夢や希望も全て失われた。私が学校で授業を受け、友達と遊び、家族と話す、そんな日々が当たり前にあるわけではないのだと感じた。一人一人の日常や夢、人生は一つの核によってこわされた。私は改めて、核の怖さやあってはいけない理由を知った。

原爆ドーム、当時の写真や遺品は、被爆者が生きた証であり、七十七年前に起きた悲惨な出来事が紛れもない事実だったということの証拠でもある。当時の記憶を何十年もつないでいく大切なものだ。その記憶は、形として残っているものだけでなく、人々の思いとしても伝えられている。今もなくなることはない核兵器。それらをなくすため、平和な世界を築くために被爆者の方々をはじめとして、様々な活動を行っていた。本当は思い出さくはないし、目を背けたいかもしれない。それでも、二度と同じようなことが起きてほしくないという願いで伝え続けている。そんな人々の思いを絶対に無駄にしてはいけないと思う。これから実体験を語れる人が少なくなっても、唯一の戦争被爆国として語りついでいくには私たち世代が知る必要がある。原爆について学んだことを身近な人に話したり、当時の人々の気持ちをくみ取ったり、小さなことが世界平和の一步になることを私は信じている。

被爆したことによって病気になるってしまった少女は、病気が治るようになると鶴を折り続けたそうだ。それから、原爆で亡くなった子供たちの霊を慰め、平和を築くための像をつくらうという運動から完成した「原爆の子の像」。今も折り鶴が捧げられ、その数は年間約一千万羽のものぼる。

私もあれから七十七年の月日を経たヒロシマを見わたしながら鶴を折った。いつかヒロシマの思いが世界に届き、一日でも早く平和な世の中になってほしいという願いを込めて。

被害者の立場

大岡中学校 三年

藤本愛生

毎年八月になると、新聞やテレビのニュースなどで戦争や原子爆弾について取り上げられることが多くなる。それはもう夏休みの恒例かのようになっていた。だから私は、しっかりニュースを見ることはせずに、右から左へと聞き流していた。

しかし、八月のある日のこと、私が朝食をとっているときに新聞のトップに掲載されていた記事が目にとまった。いつもなら素通りしていたけれど、その日はなぜかその記事に吸い寄せられるように読んで。その記事には、私よりも小さい年で原爆により両親や兄弟を失った一人の女性の話が掲載されていた。その女性は六歳の時に原爆により家族五人を失い、たった一人の弟と二人になってしまった。二人は疎開先にいたため被爆はせずにすんだが、国からの補償は何もなかった。それに加えて、愛する家族の遺骨すら見つからなかった。その後二人は祖父母に育てられた。しかし、生活は苦しかったという。私はこの記事を読んで、とても驚いた。戦争によりたくさんの方が亡くなっていることは知っていた。それにより辛い思いをしている人、苦しんでいる人がいることも知っていた。が、その大変な思いをしている人たちがどのように戦後生きていたかは知らなかった。だから、家族を失っ

でも補償をもらえなかったことが衝撃だった。家族も家も財産も全部無くなったのに自分たちの力でどうにかしていかないといけない。それがどんなに辛いことかは、私には理解できない。自分が体験したことが無いからだ。しかし、想像することはできる。それはきっと、言葉では言い表すことはできないほど辛いことだったと思う。

また、この記事の女性は、

「私は被爆者ではないが、被害者だ。私のような人がいることも知ってほしい。」

と訴えていた。私は今まで、被爆した人、悲惨な光景を目にした人、敵兵から逃げ延びた人などの話を聞いたり、日記を読んだりしてきた。だが、それだけではなく、戦争により家族を亡くした人の苦しさも知った。

この記事を読んだことで、私は原爆の恐ろしさを改めて実感した。原爆で苦しむ人は被爆者だけでなく、被爆者の家族、被爆者の子供、被爆者の孫の被爆者三世までもが辛い思いをする。そんな原爆をもう二度と投下させてはいけない。核兵器を製造させてはいけない。そう感じた。

ところが、今世界では、核兵器保有国であるロシアとウクライナで戦争が起きている。今まで、二度の大戦から、世界の国々が協力して戦争を起こさせない平和な世界を目指していた。あれほど二度と戦争を起こしてはいけないと訴えていた。けれども、戦争が起ってしまった。声が届かなかった。それは非常に悔しいことであり、あってはならないことである。

だから今、戦争の恐ろしさ、原爆の恐ろしさをもう一度感じ、声を上げることが必要だと考えた。私たちは世界で唯一の被爆国だからこそ、できることがある。戦争の無い世界、原爆投下の無い世界ではなく、戦争を決して起こさせない世界、核兵器の存在しない世界にしていかなければならない。これは、戦後の日本に生まれた私たちの使命であり、義務であると私は思う。

「戦争」を知り、伝える

静浦小中一貫学校 八年

城野結月

毎年八月になると戦争や原爆についての映像がニュースやテレビ番組で多く流れる。そして今年も被爆当日や終戦記念日の八月六日、九日、十五日には広島、長崎などの地域で黙祷もくとうが捧げられた。私は今まで戦争について関心がなく、他人事だと思っていた部分があったが、画面の中で涙を流しながら日本の平和を祈る人々、戦争は二度と起こしてはいけないと必死に語る被爆者の姿が、そんな私の目に鮮明に焼きついた。原爆を体験した人達はどれだけ辛い思いをしたのだろう。さまざまな爆風、燃え上がる炎の中、自分も生き残れるか分からない状況で愛する家族や友達が苦しみながら次々と死んでいく……それは戦争を体験したことがない私でも想像するだけでもおぞましいもの

だった。このような戦争や原爆の辛さが、七十七年前のことなのにもかかわらず本や教科書などに書かれ、多くの人に詳しく知られているということは、体験者が戦争や原子爆弾の恐ろしさを自分の子供や孫などのたくさんの人に伝えてきたからだと思う。「戦争を二度と起こしてはならない」という彼らの強い思いが、私達の世代まで伝わり続けていったのだ。

そのとき、一学期に国語の授業で学習した『壁に残された伝言』という原爆について書かれた文章が頭に浮かんだ。この文章を書いた筆者は原爆の日に放送する特別番組を作るために広島に行き、そこでいくつもの偶然を重ねて壁に残されていた伝言と出会う。その伝言は、被爆した袋町小学校の階段近くの壁の下に奇跡的に残されていたのだ。原爆が落とされた直後から臨時の救護所となったその小学校では、訪れた多くの人が行方不明者の消息を知るために真っ黒になってしまった壁を黒板代わりにして、チョークで連絡先や探している人の名前を伝言として書き残したのだ。壁に名前が書かれている人は無事見つかったのか、生きていたのだろうか、家族と再会することができたのだろうか。そう考えてみると戦争が私達にとって身近なものに感じられ、胸が強く締め付けられた。また戦争や原爆は恐ろしい出来事だということを変更して痛感することができた。

文章の最後に、筆者は『被爆の伝言』。それは現代の私たちに、あの日のことを静かに、力強く語ってくれる遺産であり、証人なのである。」と言っている。書かれた当時は身近な人を探したり必要なことを伝える伝言だったが、五十数年間を経て発見されたとき、それは戦争

の悲惨さを伝えるという意味で現代の私達への「伝言」になったのだ。私は、戦争や原爆が起きたときのことを過去の出来事として忘れてしまふのではなく、次の世代の人達へ伝えていくことが大事だということを知った。

現在、戦争の体験者や、戦争のことを語れる人がだんだん減ってきている。いつかは語れる人が誰もいなくなってしまう、戦争の辛い記憶がただの「過去の出来事」となってしまう。戦争が起きる主な原因は宗教や意見の違いなどだ。だから違う宗教や民族、意見の人を真っ向から否定し、差別するのではなく相手のこともきちんと理解し、受け入れることが大切だと思う。ロシアとウクライナなどのように世界中でまだ戦争が起きている中だからこそ、日本で平和に生活できていることを感謝し、戦争について知り、今度は私達が二度と戦争が起きないよう戦争や原爆の恐ろしさを伝えていきたい。国のために一生懸命戦った人々、涙を流し戦争の辛さを今まで語り続けてくれた被爆者や日本の平和を祈る国民などの思いを受け継ぎ、次の世代の人に語り続けることが、私達の役目であり義務だと思う。

戦争と平和

愛鷹中学校 一年

小林 優太郎

戦争と聞いて思うことは、人それぞれである。年寄りの方だったら思い出したいくないという人も中にはいるでしょうし、戦争を体験していない人もまったく良いイメージを持ちません。なぜなら過去に争いがおきたことを学び勉強しているからです。

まず戦争とは、国家の間で互いに自国の意志を相手国に強制するために話し合いで決められないことは力づくで解決してしまおうという考え方なのです。勝った方も負けた方も少なからず死者が出ます。人はそう簡単に死んでいいものではない、ありません。この戦争をより深く知り今、自分たちが平和に暮らせていることに感謝するべきではないでしょうか。

ぼくは、数年前に広島にある原爆ドームを見に行ったことがあります。それを目の前にしたぼくは、突然足が動かなくなりました。まるで、七十七年前の八月六日、その日その場に自分がいるように思いました。ドーム型の鉄骨の外部だけが今も残っている原爆ドームを写真で見ただけではありませんが、ここまで悲惨な状態であることに衝撃を受けました。この原爆が何十万という人の命をうばい、生き残った人々がどのような気持ちで毎日を過ごしていたのか、ぼくには、想像もつ

きませんでした。これは、原爆が落ちた場所を実際に見てみないと感じられない、本当に貴重な体験でした。

次に母から教えてもらった、実際に戦地で戦った曾祖父の話です。曾祖父は、中国の方に行って町を攻めていました。しかしそこでは、女から子供までも殺していたらしく、その光景を見た曾祖父は呆然としてしまい、自分の口の中を嘔^かんで血を出し、病気だとみんなをだまして日本に帰ったといえます。その時代から見ると、曾祖父のやっていることは反逆者なのですが、相手の国を攻める側もとても重い気持ちでやっていたということが分かり、自分がいつ撃たれて死ぬか分からないという恐怖感などにも襲われていたのだと思います。戦地になかった人達も、いつくるか分からない空襲を警戒しながら日々生活していたのだそうです。

そう聞くと、夜はぐっすり眠れる今の日本は平和だとみんなは思うかもしれませんが、今年の初めに、ロシアがウクライナを攻める戦争がありました。この戦争は、ウクライナがロシアに反対するグループに入るのを止めるためロシアがウクライナを攻めるところから始まりました。このように、平和と思っても、いつなときに戦争が起きるか分かりません。まして、ロシアは隣の国なので日本が標的にされる可能性だってあります。

今現在、核を持っている国は八ヶ国あります。どの国も平和を望んでいるのに、なぜ核はなくなるのでしょうか。その理由は、二つあります。

一つ目は、核が外交カードとして使われているからです。

二つ目の理由は単純で、核をやめさせようという力が弱いからです。でもぼくは、この力を強くして、いつかは世界から核をなくし、みんなが、平和に暮らせるようになってほしいと思いました。

今、自分ができることはなんだろうと考えた時、直接戦争を止めようなんて決してできないと思いました。だから、今できることは、自分が平和で安全な日々を過ごせていることに、しっかりと感謝をして、日々暮らしていくことだと考えます。広島原爆のような悲劇を繰り返さないために、何ができるのかしっかりと考えていきたいです。

無駄なこと

愛鷹中学校 二年

鈴木敬大

私は、この令和の時代に戦争が起こるとは思いもしなかった。私達中学生でも暴力で解決しようと思わないのに、なぜ戦争を起こしてしまうのだろうか。

戦争にはデメリットしかないと思う。人が死んで、大地は荒れて、自分たちの国の経済を圧迫してしまう。そして戦争には、他国の信頼を失う可能性もある。

日本は、今年の八月十五日で七十七回目の終戦の日を迎えた。戦争を体験している人は高齢となり、存命している方は年々少なくなっ

ている。実際、戦争を体験している人の話を聞いたことはなく、毎年この時期に流れてくるテレビの特別番組やジブリ映画の『火垂るの墓』などで、当時の様子を知る程度なのでどこか遠い昔の、私達には全く関係のないことだと思っていた。しかし、ロシアのウクライナ侵攻の現状をテレビのニュースで目の当たりにして、これが今、同じ地球で起こっていることに衝撃を受けた。

ロシアはウクライナがNATOに入ってしまうことに焦っている。ウクライナは自分の国を守りたい、武力に届かないと戦い続けている。こんな喧嘩は誰かが仲裁してあげればいいのではないかと思ってしまう。いろいろな事情があって、複雑な問題がからみ合い、そんな単純なことではないかと思うが、近代化の進んだ世の中では、解決できる技術があるのでないかと思ってしまう。

この戦争により世界中が大きな影響を受けている。現に食糧不足やエネルギー不足、物価上昇など、私達の暮らしにも目に見える形で影響が現れている。ガソリンの価格は高い値段で推移し、小麦や油の値段が上がっているのいろいろな加工品の価格が上がり、その傾向はこれからも続いていくと思う。

しかし、実際に戦争が起こっていると生活する人々はどうかだろうか。日々爆撃に怯え、食料が不足しているような状態は、日本に住む私達への影響など比べものにならないであろう。エアコンのきいた部屋でのんきに寝ていられることが、どんなに幸せであることが身にしみる。

戦争を早く終わらせるしくみを世界は作らなければならない。日本

では憲法第九条で戦争を放棄すると規定されているのに、世界中では戦争を放棄するというルールを作ることはできないのだろうか。

地球は戦争があるにせよないにせよ、資源が減っていく一方である。それなのに、武器や戦車などを作る戦争をするということは、はっきり言って狂っていると思う。効率化を重視する今の世の中に逆行していると思う。つまり、戦争がこの世で一番人を苦しめるものだと思う。

ある日、私は夕方のニュースをみていた。すると、戦争の話題になり、ある一人の女性が取材されていた。その女性の夫は、この戦争で妻と子どもを残して亡くなってしまった。夫は自ら兵士になった。私は、この話を聞いて心が痛くなった。

では、私が戦争へ行けと言われたら、どうだろうか。私は死が怖くて、戦場に行けないと思う。人間は、死が怖くない人なんてだれ一人いないと思う。だからこそ、この女性の夫は、家族とウクライナという母国を守りたい気持ちがあつて強かったことがわかる。

戦争は、無駄と悲劇しかうまない。この戦争がうまなければ、無駄な犠牲はうまれなかった。一刻も早くウクライナとロシアの戦争が終結すること、そして、戦争というものがこの世からなくなることをお願い。

戦争から、

日常から考えていく

大平中学校 三年

萱 沼 薫

今年の二月、ロシアのウクライナ侵攻という大きな出来事がありました。

最初、私はウクライナ侵攻というものがうまく考えられずにテレビを見ていました。しかし、様々な情報を見たり聞いたりしていくうちに、「今、戦争が起きているんだな」と少しずつ感じるようになりました。社会の授業で戦争の悲惨さを知った私は、現代で戦争なんて起こらないだろうと思っていたので、驚くような気持ちと怖いという気持ちが同時に押し寄せてきました。

また、歴史上で起きたときの戦争の映像でなく、今実際に起こっていることの映像を見て信じられないような気持ちになりました。爆撃を受けて崩れた建物、普通の道路を走っていく戦車、いくつあるか分からない、できたばかりのきれいなお墓。すべてが私に衝撃を与えました。そして、白黒ではない色のついた映像が、現代の出来事なのだと言い聞かせてくるようでした。

私は戦争について考えることが苦手です。何一つよいところが思いつかないどころか、悪い印象しかなく、何よりも、人の心に深い傷を

負わせていくものだという認識だからです。考えれば考えるほど苦しい気持ちになってしまうのに、今の私では何かの助けになれないという、もどかしさでいっぱいになるからです。しかし、戦争というものは、絶対に目を逸らしてはいけけない出来事であり、忘れてはいけけないことです。だから、今は何もできなくても、大人になったときに、助けを求めている人達に、少しでも手を差し伸べられるような人になりたいと思っています。

授業や個人的な学びで外国のことを知っていくうちに思うことは、最初聞いたときに難しいと感じる文化はあっても、全くもって理解できないということはないということです。きっとそれは外国の人も一緒です。たとえ最初は分からなくても、分かるという気持ちさえあれば、互いに分かり合うことは可能だと思います。住んでいる場所、使っている言語が異なっていようと、互いの痛みがわからなくなるほど分断された生活はしていません。大切な人を失えば苦しいし、怪我をすれば痛い。普段ならば感じることで済むはずの痛みを、戦争は感じさせてくれません。

以前、違う国の人同士が交流している動画を見ているとき、すごく温かい気持ちになりました。話すとき、伝えたいことがうまく伝わらないことがある、不便なはずなのに、彼らは皆、笑い合っています。そのとき、生まれた国が違って、一緒に笑い合えて、楽しむことができると、自分の目で見て、はっきりと分かりました。

もしもこんな風に、誰もが国境なんて気にせずに関わり合おうとしたのなら、少しずつ戦争のない世界に近付けるのではないかと思いま

す。戦争は私が思うよりも複雑で、きっとそんな簡単なことではないと分かっています。しかし、どんなことだって最初は本当に小さな一歩からだと思っています。一番最初の一歩から少しずつ大きくして、歩み続けていくことが大切なんだと、私は思います。

戦争は、たぐさんのものに深い傷跡を残します。今この瞬間だって、世界のどこかで大きな傷を負っている人がいます。文明が発達した今だからこそ、その道具で人を傷つけるのではなく、人を支えるために使ってほしいと思いました。

戦争が残した大きな傷

長井崎小中一貫学校 八年

大川 蒼 真

この夏、沼津市立図書館へ「原爆と人間」パネル展を見に行った。そこには、十数枚の戦中戦後の絵、写真が展示されていた。その中でも、一番印象に残ったのは、病室のベッドの上で背中全体を真赤に火傷した少年の写真だ。広島原爆投下後の写真だった。彼は、なんとか原爆から生き残ったが、あまりの痛さに、涙を流しながら、「殺してくれ。殺してくれ。」

とさげ続けたと記されていた。後に、大人になったその少年は、「生き抜くには、いくつもの地獄を乗り越えなくてはならなかった。」

と言ったそうだ。平和な日々を過ごす自分には、この人の言う地獄を本当に理解することはできない。生き残ることができたのにもかかわらず、殺してくれなんて、きつと想像をはるかに越える程、痛く、苦しく、辛い日々を送ってきたのだ。また、この苦しみに耐えられずに、死んでしまった人々もいるそうだ。戦争も原爆も、地獄しか生まないのだと思う。それなのに核保有国はいくつもあり、現在も戦争している国がある。それは恐ろしいことだと思う。もつと思いやりや、優しさを国のトップの人たちが持てばいいのに。

僕の曾祖母も戦争体験者だった。ある日、曾祖母にかぼちゃの種をお菓子にしたものを食べるか聞いたたら、

「食べない、かぼちゃって聞くだけでも嫌。」

と言った。いつもは、温厚で優しい曾祖母がきつぱりとそう言ってきたので驚いた。なぜあんなにかぼちゃのことが嫌いなのか祖母に聞いてみると、

「戦争中は、食糧不足でかぼちゃをずっと食べていて、あげくのはてに種まで食べた。一生分のかぼちゃは食べたから、見るのも嫌なのだ。」

と教えてくれた。戦争が終わり、どんなに年月がたっても体験した人はつらい記憶を持ち、苦しみ続けているんだと思った。米つぶを残してはダメと小さい頃から言われてきたが、その本当の意味が、戦争時代の飢えと戦い生きぬいてきた曾祖母のような人たちの思いから来ているような気がした。

『百万回生きたねこ』の作者佐野洋子さんの書いたエッセイ、『死ぬ

気まんまん』という本がある。この作品には、少しか戦後のことが書いてあった。母、父、兄、二人の弟と妹と暮らしていたが、弟も兄も父も戦後数年で亡くなった。特に、一番仲が良かった弟のタダシが亡くなったことについて、

「タダシは白い米を生涯一度も食わず死んだ。たぶん栄養失調で、熱と闘うエネルギーの蓄えが一グラムもなかったのかも知れない。」

と書いていた。今ではあたり前のように食べている白米も食べられずに、今ならすぐに治すことのできるような病気で、栄養が足りず死んでしまい、人が死ぬことがあたり前になり、悲しくても涙も流れない時代。ぼくは胸が苦しくなった。家族が死んでしまったら、みなが悲しみ涙を流すのが当然だ。それができない。こんな時代は二度とくり返してはいけなさと強く思った。

自分は、今回初めて戦争について深く考えた。そして「こんな地獄のような時代が二度とこないでほしい。」と願わずにはいられなかった。しかし、願うだけでは、なにも変わらない。同世代の多くの人々に、昔本当にあった悲しい出来事をくわしく知ってもらいたい。そして考えてほしい。戦争をなくすには、どうすればよいのか。ぼくは、大人になってどんな立場に立っても絶対に争いや戦争で物事を解決するような考えに賛成したりしない。

心に刻まれたもの

長井崎小中一貫学校 八年

葛野 颯太

みなさんは、平和という言葉はどう考えているだろうか。私は今年の夏にもう一度平和について考えてみることにした。平和という言葉を一言で表すとしたら、

「笑顔」

ではないかと私は思う。笑顔ではないと思う人はたくさんいるかもしれないが、私はこれが一番だと思ってきた。七十七年前の夏に広島と長崎に原爆が投下され戦争は終結。その当時の人たちは笑顔で過ごしていただろうか。どこか不安で恐怖を抱えていたに違いない。しかし、今は昔と比べても毎日を笑顔で送る人が増えたと私は思う。でも、まだまだ笑顔で暮らせていない人はたくさんいることを忘れてはいけない。

私は今年の大きなニュースを見て、とても驚いた。それは、ウクライナ戦争だ。最初は軽く考えていたが、今となってはとても大事になっている。

日に日に更新されていくウクライナ戦争のニュース。私は、そのニュースを見るにつれて、どれだけウクライナの人たちが苦しんでいるのかが分かった。そんなニュースを毎朝見るのはとてもいやだった。

毎日出る死者数。毎日見る戦争時の映像。それが段々増えていく。増えるにつれて、ウクライナの人々の涙も増える。兵隊の人は、血を流しながらも、ウクライナの人たちを守る。この人たちは、家族に会いたくても会えずに、我慢しながら戦っている。そのことを世界の人たちが、知る必要があり、ウクライナ戦争は絶対忘れてはいけない。そして、今ロシアがしている無差別攻撃。それは、子供でもお構いなしに攻撃をする。その子供の死者数は、約二百人。私は死者数を見て、戦争の恐ろしさを改めて実感した。ニュースで、ウクライナ側の人の主張を見ることがある。その人たちは、父が戦争に行き、母と子だけで過ごしている。父と離れ離れはいやなのか、毎日子供が泣いているという。私は、それを見るたびに毎日かわいそうだなと思う。まだ幼い子が父親と会えないのはとても辛いことだ。母親も同じ気持ちだろう。そして、ウクライナの人たちは、いち早く終戦を願う。

今も、ウクライナや内戦が起きている場所で、誰かが涙を流している。今も誰かが苦しんでいる。私たちの日常生活は平和かもしれないが、世の中には苦しんでいる人がたくさんいることを忘れてはいけない。日本は戦争がなくて平和だ。しかし、日本でも、また戦争が起きたらどうするのか。家族と離れ離れになり、笑顔がなくなってしまう。だからこそ、一人一人が優しい心を持ち、戦争を二度と起こさないと、いう思いが大切だと私は思う。

今現在、戦争が起きているだけでなく、コロナウイルスが流行している。コロナは数年たっても、勢いは衰えていない。コロナは目に見えない恐ろしさがあり、世界中で猛威を振るい、亡くなっている方も

多い。コロナに感染した人だけが苦しいのではなく、医療従事者の方々も辛いのだ。毎日コロナと戦い休む暇なく、汗水流しながらコロナ感染者を救っている。医療従事者の負担を少しでも減らすことが私の仕事なのではないだろうか。

戦争やコロナ、世界にはたくさん課題があり、少しずつ減らすためには、一人一人が協力し、世界のみんなが協力しあうことが必要だと思う。

私は、広島・長崎の平和記念公園や知寛特攻平和会館に行ったからこそ、人一倍に命を大切に思い、戦争の悲惨さを伝える財産は、これからずっと大切にすべきものだと思う。何度も言うが、戦争はどんな理由があろうと、やってはいけないものであり、戦争をなくすためには、一人一人の優しさや思いやりが必要で、戦争を二度とやってはいけないという心があれば、絶対に戦争はなくなるのではないだろうか。

昔の戦争と今の戦争

長井崎小中一貫学校 八年

塚田 昊

今の時期はロシア連邦とウクライナの戦争のニュースが流れている。

そのニュースを見ると、五年生のときに行った広島にある原爆資料館のできごとを思い出します。ぼくは資料館へ行く前に、先に原爆ド

ームを見ていた。原爆ドームのボロボロになった姿は、当時五年生だった自分にも原爆の恐怖が伝わって来るほどだった。ぼくは、原爆ドームを見て、原爆資料館でもっとくわしく知るのが怖くなってきたが、母親から「このことは絶対に知っておかないとダメ。」と言われたので、見に行くことに決めた。

原爆資料館の中では、まず初めに原子爆弾の威力や怖さについての解説があった。ぼくはそれを見ていたとき、こんな物が世界に存在していることが信じられずにいた。だが被害にあった実物を見るとやはり実在しているのだと思った。そこには、黒こげになった自転車、人が着用していたボロボロになった衣服などがたくさんあった。しかし原子爆弾の被害は物だけではなかった。原爆が落とされた近くにいた人は、熱風で皮ふが焼け落ち、遠くにいた人は熱風の被害は受けなかったが放射線の影響により、後から病気にかかって死亡してしまう。さらには、天候までも被害が出たらしい。原子爆弾により、雲からまっ黒に染まった雨が降りそそいだのだ。毒があると分かっている水がなく、のどがかわいた人々はそれを飲んだらしい。今思うとぼくは日本体験した戦争の怖さというものを広島の原爆資料館で知っておりて良かったと思った。

しかし、その日本での最悪のでき事がいつか起こるのではないかとぼくは心配になってきている。今ではニュースで言われることも少なくなってきたが、今もなお続いているウクライナとロシアの戦争のことだ。もう始まってから六か月以上もたっているが、まだロシア連邦はウクライナへ侵攻を続けている。ロシアとウクライナの両方にも

死者はたくさん出ている。他の国はロシアに経済的制裁を行っているが、このままではまずいとぼくは思う。なぜなら、ウクライナの抵抗に対してロシアが保有している核を使って日本と同じことがくり返されてしまうかもしれないし、経済的制裁をしている他の国にまで戦争をしかけてくるかもしれない。ぼくは心配性なので深く考えすぎてしまいが、もう少し自分たちとは関係ないと思わない方が良いのかもしれない。

どうすれば戦争を防ぐことができるかなと考えてみる。戦争を身近にある物でたとえるとケンカがある。

他者の意見を聞かずに自分自身の意見を押しついたり、先に手をだしたりするとケンカになってしまう。自分の意見を押しつけるだけでは、自分は良くても相手が良くないかもしれない。そこから言い争いに続いてしまうと思う。これは戦争が始まる原因にも似ていると思うので、やはり他者の意見を大切にすることが平和に繋がる第一歩だと思った。だから世界の代表全員で話し合ったりできるだけ相手の意見を聞いたりすることが必要であると思った。

今では、戦争で起きたことを体験した人は減少している。そこから若者も戦争のことを軽く見ている人が多くなっている気がするのです、やはり戦争で起きたことは、語り継いでいくべきだと思った。

託された未来・十五の決意

原中学校 三年

富岡将志

「戦争孤児」それは戦争が残した最も深刻な被害だったと思う。見上げれば赤く光る炎の玉、手の平から離れてしまった親の腕、やがて両親が戦死してしまっただけという知らせを耳にしたとき。彼らの苦しい思いは私を含め、現代を生きる若者にはとても計り知れないだろう。

日本各地に降り注いだ爆弾、それに比例して膨れ上がる戦争孤児。私たちは彼らのことを、生き延びることができただけでも不幸中の幸い、とても思うべきだろうか。私には、そのように思うことはとてもできない。連合国軍最高司令官総司令部、GHQの指示で行われた一斉収容、いわゆる「狩り込み」。国が行った彼らに対する策からさえ、彼らは逃げ切らなければならなくなってしまったのだ。もう頼る先などないのだ。歴史の教科書に「GHQの指導の下で戦後改革を行った。」と書いてあったが、これも改革の一環とでもいうのだろうか。未来ある子どもたちを邪魔者扱いして何が改革だ、そう口を開くことができるのは何十年もたった今までの話である。戦争はそれだけ世の中を引っかき回す、残酷な出来事なのだ。

八月十五日、あの日のことを本当に終戦の日というべきだろうか。彼らにとっては、今までの何倍も何十倍もつらく苦しい日々幕開け

だったのではないか。しかし、そんな苦しみの記憶が国内外で消えつつあるのが現状。「ウクライナ侵攻」や「台湾情勢」、武力で参戦していかなくても、世界各国とつながりを持つ日本はこれらの問題と密接に関わり合っていて、一刻も早く解決していかなくてはならない。一見特に影響を受けていないように見えて、物価の上昇や大きな不安にさらされる毎日。いつ日本も巻き込まれ、テレビでしか見たことがない残酷な光景を目の当たりにするのか、全く想像がつかない。歴史ある日本に住む私たちが今、起こすべき行動、それは後世に伝え残すこと。

「後世に伝え残す」あなただっただけ何を伝え残すだろうか。一度深く考えてほしい。今、あなたが頭に浮かべたもの、きっとそれが正解だろう。私のように、戦争が我が国に与えた最も甚大な被害は、「戦争孤児」だという人もいれば、広島、長崎の原爆投下を筆頭とする全国各地の「空襲」だと思う人、はたまたどれも深刻な被害だったのだから、順位づけをするべきではないと主張する人もいるだろう。あなたが頭に浮かべたその思いを後世に伝え残すべきだと思うのだ。「沖縄返還五十周年」「ウクライナ侵攻」「核保有化」「台湾情勢」二〇二二年に入っ

て耳にすることが多い単語だ。どんなに知識、関心がなくてもこれらを聞いたときに分かることは戦争に関わることで、そして何より、後世に伝え残すべきこと。やはり私の中ではこれが一番なのだ。

戦争を経験していない、ましてやまだ十数年しか歳を重ねていない私だが、どのようなことが戦争を誘発してしまうのか、どのような被害をもたらしてしまうのか、戦争が明けた後、どのような問題が起こるのか、あらゆることを世界中に発信していくべきだと思っている。

その思いの強さは戦争経験者と変わらないと思う。また、発信だけにとどまらず、今、戦時下に置かれている地域との連携、協力も欠かすことなく続けていかなくてはならない。戦争を起こさないためにとつた行動は決して無駄ではない。積極的に自分が最善だと思った行動を起こし、平和な世の中をつくるのがこの世界を生きる私たちに求められている。

かつての恐怖

浮島中学校 一年

杉 沢 蓮 馬

僕は今、朝起きて食事をとり、洗濯をした綺麗な服を着て、寝心地の良い布団で寝る、そんな毎日を過ごしています。それは生まれてからずっと続いている日常で、保育園に行き小学校に行き、今は中学校に通っています。当たり前のことが当たり前にできることを、つまらなく思ったり退屈に思ったりする日もありますが、それが平和なのだと思います。

現在、ロシアがウクライナに侵攻していてロシアやウクライナの人たちは平和とは程遠い毎日を過ごしています。ニュースやネットでそのことを見ても、非現実的すぎて実感がわきません。同じ時代に同じ世界に生きているのに、こんなにも生活に差があることが悲しいです。

また、北朝鮮が弾道ミサイルを放つ映像を見ると、僕たちがその様になる可能性も絶対には言えないと思ひ、恐怖を感じます。日本の憲法の原則には平和主義があり、日本を守るための自衛隊はありますが軍は持っていません。しかし、日本から攻めることは無くても攻められる可能性はあります。つまり、侵攻される危険があるということとです。

僕は、広島を訪れたことがあります。それまでは小学校で勉強した『ちいちゃんのかげおくり』やテレビで見た『火垂るの墓』で漠然と戦争のことを知っている程度でしたが、そのときに戦争に対しての意識が大きく変わり、生まれてはじめて平和の大切さを学んだ気がしました。そして、

(平和な世の中をつくるのは、とても難しいんだ。)

と思ひました。広島では、原爆ドームと平和記念資料館へも行きました。そこへ行くまでは、原爆と聞いても街ごとなくなる恐ろしい爆弾くらいの知識しかありませんでした。平和記念資料館には、原爆が落とされ建物が一瞬で崩れていく様子が表現された展示物や、動く様子もない母親にすぎる幼児や、子供の名前を呼び続ける母親など、当時の人々が表現された絵などが多数展示されていきました。原爆が落ちた瞬間に人々を消し去った情景を見て、原爆の激しさ、核の恐ろしさを知りました。今も残っている原爆ドームは、あの日広島の人々が感じた恐怖を後世に伝え、誰もが平和に暮らせることを願っているように感じました。

戦争がある限り、平和な生活はできません。日本を含め世界の国々

や国際連合では、国際的な平和を維持することを目的とした様々な活動が行われています。例えば、コスタリカでは、「軍隊を持たない」と決め、他の国にもはたらきかけました。また、二〇三〇年までに達成すべき目標であるSDGsには、「平和と公正をすべての人に」という目標もあります。

今は、世界中を巻き込むような大きな戦争は起きていないし、世界中で対策もしています。しかし、全く戦争がないわけではありません。今、僕が戦争をなくすためにできることはほとんどありませんが、戦争の恐怖を知り、平和を大切にすることが大事だと思います。

声と記憶

浮島中学校 二年

久保田

葵

二月二十四日。メディアの報道を見て戦慄したあの瞬間のことを、私は今でもはつきりと覚えていいます。

母から教えてもらった曾祖父父母の戦争の記憶。本や報道で見た人々の苦しそうな様子。終戦から七十七年。平和なことが当たり前になってきたこの時代に、あの惨劇がまた繰り返されるのかと思うと、恐怖を越えて憤りを感じました。

しかし、実際に戦争が起こっているのは、日本から遠く離れた場所。

しかも、コロナ禍や物価の高騰などが重なり、支援が難しくなっている。そもそも、ただの中学生でしかない自分にできることは無いのかもしれない。そんなモヤモヤとした気持ちを抱えたまま、でも特にそれ以上に考えることはなく、ただ呆然と報道を眺めていました。

あの日から半年が経とうとしていた頃、私のこのモヤモヤとした気持ち晴れるきっかけとなったできごとがありました。それは、国語の授業で『壁に残された伝言』という著書について学習をしたことです。

著者が取材をした、五十年以上も昔に書かれ、奇跡的に壁に残っていた、チョークで書かれた黒い不思議な伝言の話。伝言の残り方や、この伝言を写した写真があったことで伝言が読めた、という奇跡もそうですが、その後に記載されていた人々の様子でした。当時その場に入った人やその家族達は、いとも簡単にかすれた伝言を読み、「ああ、そうだったのか。」と涙を流しました。

私はこれを読んだとき、長い長い時を越えて人々が繋がったということへの感動と、何かを掴んだような不思議な気持ちを感じました。しかし今は授業中。考え込む訳にもいかなかったため、またもモヤモヤした気持ちをそのままに、課題である班での話し合いをはじめました。議題は、丁度私が考えていた文章にあった「なぜ伝言を読み、そうだったのかとつぶやいたのだろう」というものでした。案の定、私は意見がまとまらず、話し合いに参加できていませんでした。すると、班のうちの一人が、

「この人達は、忘れなかったんだね。」

と小さな声で呟きました。ただの独り言。しかし私にとってはモヤモヤした気持ちを解きほぐす、重要な鍵となりました。

当たり前だと思っていた「忘れない」。でも本当は、今昔に生きる人々を繋ぐ、かけ橋だったことに、この瞬間気付きました。

忘れなかったから、伝言が読めた。忘れなかったから、そうだったのかと呟いた。

忘れなかったから、曾祖父母は母に、母は私に戦争の記憶を教えてくださいました。忘れなかったから、人々は平和な世の中を創ろうと努力し続けています。全てが繋がっていました。もしかしたら、今の平和の原点は、「忘れない」なのかもしれません。

私はこの授業のおかげで、平和のために、そして自分の大切なものを守っていくために自分にできることをまず一つ、見つけました。「戦争を忘れない」ことです。人々の記憶や戦争が起きていたという事実を、書庫のように自分の中にしまっておくのです。しかし、戦争の記憶は今の時代を生きる私達皆で忘れないようにすべき、大切な歴史です。だから、本をしまっておくだけではなく、図書館のように人に伝えることも、できるようにしたいです。

そしてもう一つ、気付いたことがあります。それは、ただの中学生が、国を統べる立場にある人よりも、平和について考えているかもしれないということですが、

どういう理由で戦争をはじめてしまったのか、本当の理由は分かりません。もしかしたら、国に住む人々を守るためかもしれない。しかし、理由が何であっても、やり方が間違っています。そういった立場

の人々の中にも、間違っていると分かっているけれど、事情があつて声を上げることができない人もたくさんいると思います。ならば、私達が声を上げていけばいいと思います。一人にできることは少なくとも、皆の声が集まれば、いつかきつと。

半年以上が経過しても終わりが見えない戦争の収束を祈り、私はここに声を上げます。

忘れてはいけないこと

浮島中学校 三年

成島 明依

中学生になって戦争について考えることが多くなりました。例えば歴史の授業や小説などを通してです。私は授業で習う前や、戦争についての本を読む前は、戦争について深く考えることがありませんでした。

授業で習った戦時中の様子は、あまりにも残酷でした。子どもたちは、立派な兵士になるように育てられていました。食事も質素なものでした。当時の方は、白いご飯を腹一杯食べられたらな、というのがその頃の最大の願望だったと語っています。子どもなのにたくさん我慢しなければならなかったと考えると、胸が痛くなります。学校でも敵国に攻撃する訓練が行われたそうです。青竹を銃剣の代わりにして、

敵陣攻撃の練習や行進、整列、ささげ筒の演習も毎日のように行われたそうです。また、空襲の折には地下壕ごうを作り避難したりもしたそうです。いつ命をうばわれるか分からず、とても不安で怖かっただろうと思います。子どもたちだけでなく、大人も辛かったと思います。男性は軍隊に召集され戦死する方もいたことは、とても悲しいと思います。もし家族が……と考えると悲しいです。戦いたくもないのに戦った当時の人に感謝して過ごしていこうと思います。

私の読んだ小説では、原爆のことについて詳しく書いてありました。同じ年くらいの女の子が働いて、自由もないような生活をしていました。憲兵からの体罰、近所の人からのいじめなど私だったら耐えられません。家族を原爆で失った悲しみと怒り、原爆による後遺症に悩み、とてもストレスだったと思います。

授業で原爆投下後の様子を見たことがあります。建物は破壊され、死体がそこら中にころがっていました。爆心地付近は約三千℃で、付近にいた人々は即死だったようです。二km以内にいた人はしばらく意識があつたそうです。激痛を感じながら亡くなったと聞いて本当に悲しいです。三km付近にいた人は生き残っている人が多く、水を求めて動いている人もいたそうです。そして水を求め、川に飛び込み水死する人も多かったそうです。こうしたことから、水を求めて亡くなった多くの人々のことを思って、平和記念公園の「原爆の子の像」のそばに「平和の泉」がつくられたり、八月六日の「平和記念式典」で献水がなされたりされているそうです。

たくさん命をうばった戦争を風化させてはいけないと、私は思い

ます。風化させないために、私たちには何ができるのでしょうか。例えば、このような平和作文を書いて戦争について考えることも一つの方法だと思えます。また、原爆の被害を受けた広島や長崎を訪れたり、戦時中の人々の話を聞いておいたりすることも、大切だと思えます。私たちが教えてもらったことを、次の世代へ、また次の世代へと伝えていけたらいいなと思います。世界中の人が幸せに暮らせる、そんな世の中になつたらうれしいです。

「神風特別攻撃隊」 について思うこと

門池中学校 一年

大沼 昊平

ある日突然、「〇月〇日にあなたは死んで下さい。」と、国から命令が届いたらどうしますか。僕は間違いなく、断ります。それが普通の人の考え方だと思うからです。

しかし、今から八十年程前の戦時中の日本は違いました。映画『永遠の0』を観て、初めて特攻隊の存在を知りました。原作本を映画化した作品で、著者の百田尚樹さんは、この映画を通して、家族愛や人間愛を伝えています。

昭和十六年から昭和二十年の間に太平洋戦争が起きました。日本帝

国海軍は「神風特別攻撃隊」という戦闘機部隊を編成しました。戦術は、敵である米国艦隊に向け、戦闘機ごと体当たりする、戦死が前提の作戦で、戦闘機に搭乗するのは大半が二十歳前後の若者で、最年少は十七歳であったことを知り、とても衝撃を受けました。

神風特別攻撃隊は、戦後マッカーサーが「かみかぜ」と読むことに統一し「神風特攻隊」と日本でも呼ばれるようになりました。

この時に使われていた戦闘機は「零戦」と言い、正式名は「零式艦上戦闘機」です。設計者は、宮崎駿監督のアニメ『風立ちぬ』の主人公、堀越二郎です。

そんな零戦ですが、特攻の際、敵の砲撃にあって、ほとんどが撃ついされ、次々と海へ墜ちてしまいます。三千三百機の内、約一割しか軍艦に到達できなかったと考えられています。敵艦隊を五十そうほど沈めました。

なぜ若者は、自分の命を懸けてまで特攻に参加したのか、僕には理解できませんでした。調べると、二つの理由があったようです。

一つ目の理由は、体力勝負の訓練では、若者が適していることや、新しいことを学ぶための知力も、若者の方が覚えが早かったからです。

二つ目の理由は、国のために戦死したとしても、それは名誉なことであり素晴らしいことだと教育されていたことです。誰もが国を守るためならと、特攻を希望して当たり前という「同調圧力」があったからと言われています。その圧力に屈せず、断れなかったのでしょうか。

当時の日本は、国の方針で軍の命令に反対意見を持つ者や、反発する者は「非国民」か「戦争犯罪者」として扱われ、自分だけではなく、

家族や親せきまで、その後の人生で苦勞をかけてしまします。家族に迷惑をかけて汚名を着せられながら生きるより、戦死して名誉を守ることを選ぶしかなかったのです。若者が戦争に巻き込まれ、三千から四千人もの特攻隊員が戦死したことは、本当に悲しくて悔しい気持ちになりました。今日にも特攻の命令が出されて、いつでも死ぬ覚悟を持って、残された時間を生きるなんて想像も出来ません。

特攻の出撃二時間前に写された実際の写真を見ました。十七歳から十九歳の数名が笑顔で写っている写真です。僕たちが友達と楽しく話をしている瞬間と同じような時間がそこにはあるように思いました。

個人が自分のために生きることが許されない時代に僕が生まれていたら、学校に行つて勉強したり、友達とはしゃいだり、家族と楽しく出掛けたり、おいしい食べ物を楽しめることも、温かい布団で眠ることもできなかったかもしれません。

映画の主人公、宮部久蔵の言葉を借りるなら、「自分の命は彼らの犠牲の上にある」

今当たり前のように過ごしている日常は、僕たちと同じ世代の昔の若者や、多くの犠牲者、生き延びてくれた人たちによって引き継がれた社会があるおかげだと感謝したいです。僕は自分の意志で未来を生きるための選択が出来ることが、本当に幸せです。

茶色の感謝状

門池中学校 二年

中村文音

父の実家に遊びに行った時だ。祖母が古い額を持ってきた。額の中には茶色に変色した賞状が入っていた。

よく見てみると「感謝状」と書いてあり、文章には知らない言葉がたくさん書いてあったので、祖母と父に何と書いてあるのかを聞いてみた。

「昭和二十年、日本陸軍の補給機が輸送途中に墜落し〇〇（名前）少尉が殉職したが、遺体を無償で火葬した事に感謝する。」

戦争の長期化とともに道義が乱れている時勢において誠に奇篤な行為に感謝する。

昭和二十年八月二日

師第三四二〇一部隊平岡隊長平岡富造

と、書いてある内容を教えてくれた。

曾祖父が住んでいた埼玉県比企郡小川町付近の山腹に飛行機が墜落し、曾祖父が救助に行ったが、搭乗員は死亡していて、曾祖父は病院に遺体を運び、その後遺体を火葬したらしい。これら一連の行為を無償で行ったということで陸軍から感謝状が贈られたそうだ。

私が気になったのはなぜ飛行機が墜落したのか。父と一緒に調べて

みたところ、師第三四二〇一部隊は、陸軍の航空輸送部隊で内地で完成した戦闘機や爆撃機を第一戦部隊に空輸するのが任務だった。しかし昭和十八年、十九年になると悪天候や撃墜、さらには機体の仕上がりや整備不良、飛行経験の浅いパイロットが目立つようになり、犠牲者が増えたことがわかった。感謝状の一件も機体にトラブルがあつて墜落したのかもしれない。

今、日本は経済大国として世界に知られているのに、太平洋戦争当時は資源がなく、食料も不足する中、精神力で戦争に勝とうと、劣悪な状況の中で戦争をしていたのだ。

兵器を作るにしても男性は兵士として戦場に行ったため、女学生までが兵器を作っていた。戦争末期になると日本全国の大中の都市が空襲に合い、建物は破壊され多くの人たちが亡くなった。私たちが住んでいる沼津も例外ではない。今の私たちは学校で勉強や部活をしたり友達と遊んだりしているが、七十七年前では、戦争に勝つまでは我慢する生活をしていた。

しかし現在、ウクライナ情勢をテレビで見ていると、ミサイル等で破壊された建物、その傍らで悲しみにくれている人々の姿。日本が経験してきた悲劇を再び繰り返しているではないか！ どれだけ人々の悲しむ姿を見なくてはいけないのか、どれだけ破壊される光景を見なくてはいけないのだろうか。

太平洋戦争を経験している祖父母は「絶対に戦争はよくない。」と言う。亡くなった曾祖父も同じ事を言うだろうなと思う。

曾祖父が住んでいた小川町。現在戦争のつめ跡はほとんどないよう

だが、一度訪ねて、曾祖父がどんな思いで救助しに行ったのか、町を歩きながら曾祖父の事を思い描いてみたい。

戦争に勝者はいない。誰しもが傷を受ける行為なのだ。今一度、曾祖父の「茶色の感謝状」を見ながら平和の大事さを学びたい。

絶えぬ争い

門池中学校 三年

小坂 享介

なぜ人は、同じ過ちを繰り返してしまうのか。学校の歴史の授業で戦争について勉強をしたあと、家に帰りテレビを見れば戦争の話題。ここ最近はずっとそのような毎日が続いている。こんな生活を毎日していると平和とはなにかと考えることがある。ウクライナで起きている戦争は到底許されるものではない。この戦争を機に世界中の人が平和とはなにかを改めて考えるきっかけになり、その平和もほんの些細なことでも一瞬にしてなくなってしまうということが分かったのではないだろうか。改めて「平和」について考えてみようと思う。

まず、同じ過ちを繰り返す事についてだ。これまで人類が歩んできた歴史は常に争いが存在した。そして、その度に大勢の命が奪われ、環境は悪化した。それに伴って兵器はより凶悪になっていく。広島、長崎に落とされた原子爆弾が例としてあげられるだろう。一九四五年

八月六日、広島市に原爆が落とされた。これまでの町並みは一瞬にして火の海へと化した。本当に許されないことだと思う。しかし、立場が変われば、見方や考え方も大きく変わる。この原子爆弾による攻撃も自分たち日本人からしてみれば、蛮行としか思えない。しかし、戦勝国のアメリカが、これは正義のための行為だと言い切れば、敗戦国の日本はアメリカ側の考えに迎合するしかなく、原爆投下は正当化されてしまう。だが、どう理由をつけようが、正しい戦争など存在しないのだ。

わたしは、このように勝った側の意見が正しいとされている世の中の風潮は争いを生み出す素になると思っている。ロシアによるウクライナ侵攻が始まり半年になるが、多くの人が死に、経済は悪くなり、世界情勢も悪化する。こんな誰も得のしない戦いは早くやめてもらいたい。意地のぶつかり合いに人の命そして国力を使っているのは、本当にいつか人類の戦争によって地球がどうにかなくなってしまいうさだ。

僕は人類が手を取り合つてともに支え合っているような世界を目指していつてほしいと心から思っている。そしてそのような世界の現には世界中の人たちの協力が必要不可欠だ。核兵器をなくす活動や非難するということは唯一の被爆国である日本が先陣を切つてやるべきだ。平凡な生活が、平和がいつ唐突になくなるかわからないことを今回の戦争で理解した人が多いであろう。この二度と起きてはいけないう出来事をリアルタイムで体感している私たちこそが、原爆の被害を訴えている人たちのように後世に伝えていくことで少しでも戦争に反対し、平和を望む人が増えると思っている。そして世界中の人たちが

手を取り合つて協力する、争いのない夢のような世界がいつか現実になることを心から願っている。

平和と政治について

今沢中学校 二年

遠山 蘭

私はこの前、戦争が題材の本を読みました。戦争が起きていたところの日本の光景は、とてもひどく二度とこんなこと起きてほしくないと思いました。日本は一九四五年に戦争に負け、降伏し、ついこの間は終戦記念日でした。

しかし、今でも戦争が続いている国はたくさんありますし、ロシアとウクライナの戦争は、世界中が注目するほど大きな戦争だといえます。私たちが住んでいる日本も、いつ戦争が仕掛けられるか分からないのです。戦争は大昔の小さなものから、時が経つにつれ文明が発達していき、大きくなっていきました。集団で戦いを仕掛けられ、負けた方は、悔しい、資源がないなどでやり返します。こうした戦争は世界中で起こっており、もう歯止めが効かないレベルになっているので、戦争をなくして平和になんてそうそう出来ません。かといってこうした場面で、なにも関係のない人々が巻きこまれていく様を無視することも出来ません。なので、募金などで、そういった人々の生きるため

の支援をすることは大切だと思います。

多くの命がうばわれていく戦争に日本が参加しないために、まずは、一人一人が戦争に対する知識を身につけて、考えていくことが大切です。そのために、政治にもっと興味を持って日本がこれから向かう先を若い世代が考えることが必要です。学校では、戦争についていろいろなことを学びますが、どれも昔のことで身近に考えていないと思います。実際私もそうでした。しかし、この作文を書くにあたり、様々なことを調べていると、日本にとっておかしなルールがあることも知りましました。日本が強制的に、戦争に参加させられる未来があるかもしれないのです。日本が平和ではなくなる日が来るかもしれないということですね。私はこれを見てとてもおどろきました。日本を守るために働いてくれている自衛隊の方たち、家族、友達、子供達が、何の罪もない人々を殺し、殺されるかもしれない、そんな国になる未来があるかもしれないと思っただけです。ニュースを見ていると、ウクライナの人々は、ロシアとの戦争で住む場所もなくしてしまったり、逆にロシアの戦争に参加させられている若者は、罪なき人々の命をうばわなければいけなくなったりしているのです。だから私たちは考えなければいけません。自分たちが住んでいるこの日本という国について。今はまだ考え、人と共有することしか出来ませんが、十八歳になれば自分の意見を政治に反映することが出来ます。そこで、日本について考えなおし、自分の一票で日本を変えていくのです。日本が平和な国でいられるよう日本国内を正してから、他の国について考えます。きっと今も戦争は起きていて、どこかで、罪なき人々の命がうばわれています。きっと全

ての争いをなくすのは、とても難しいと思います。しかし、私たち一人一人が戦争についての意識を高め、考えていけば未来も変わっていくはずですね。平和にしようとうたったえるだけではなく、政治の状況などを見て、自分の考えをいろいろな世界の人々と交わし、考えていくことが大切なのです。ただ戦争のことについて考えるだけでなく、先を見てこれからの未来のことを私も、改めて考え、平和について知ることが出来ました。みなさんも平和について考えなおしてみたいかがでしょうか。

小さな幸せを守りたい

今沢中学校 二年

一 杉 瑠 子

先日、テレビのある番組でカルガモ親子の引越しを警察が手伝っているのを見た。とても微笑ましかった。近所の人達、テレビの視聴者がこの光景を見守っていた。ほのぼのとした様子が見られる日本は平和だなとしみじみ感じた。しかし、他国では悲惨な状況が見られている。

二〇二二年二月二十四日から続いているロシアによるウクライナ侵略。この出来事が起こった理由として次の二つが挙げられる。「同じルーツを持つ国でありロシアはウクライナを自分のものにしたかった

から」ということと「ウクライナのNATO加盟を阻止しなかったから」だ。前者を簡単に言うとして「ロシアは自分の国を大きくしたい」ということだ。後者については、そもそもNATOというのはソビエト連邦に対抗するためにアメリカがつくった軍事同盟である。だからロシアは、すぐ隣の国がNATOに加盟することを非常に恐れていたのだ。ロシアのプーチン大統領はウクライナ侵攻を宣言する演説会で「自分の国と国民を守るのに他に方法がなかった」と言った。

哲学者のホッブスは「みんな自分が利益を得るために戦争をするのだ」と言った。つまり人は自分にとって都合が良くなるように争いをし、相手の国を苦しめているのだ。これではいつまでたっても戦争はなくなるらない。

戦争を少なくするための一つの考えとして世界中のみんなが命の尊さを知ることが大切だと思った。例えば自分の大切な人が亡くなったらいくら人を傷つけることばかりしている人でもとても悲しむだろう。その辛さをわかっているはずなのに、誰かの大切な人を苦しめようとしている。これは「自分とは他人だ」ということだけで命の尊さを忘れてしまうということなのだろうか。

もちろんロシア兵の人にもウクライナ兵の人にも家族がいて大切な人がある。中には私と同じように平和を願っている人もいるだろう。でも「戦争」に行くとき国を守りたいという思いから、相手を傷つけることができてしまう。これが戦争の恐ろしさだ。

私は日本は平和な国だと思っしこれからも戦争を起こさない国であってほしいと思う。実際に日本は日本国憲法第九条で「国権の発動たる

戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。」と定めており、戦争をしないこと、また核を持たないことを宣言している。これには賛否両論ある。戦争をしないで平和でいることが大切と考える人もいれば、核を持たなければウクライナのように攻められてしまうと考える人もいるだろう。今他国では、ライバル国よりも優れた核兵器をつくろうとして核兵器の脅威が増している。

日本は、広島と長崎で二度原爆を受けその苦しさをよく知っている。その日本が核を持たないと言い続けることは、核の脅威が増している世界に核のない世界にしていくことを呼びかける役割を持っているだろう。

テレビで女子高校生が原爆のときの様子を描いた絵を展覧会で観覧者に説明しているのを見た。彼女はその絵を見たときに衝撃を受け、この絵をたくさんの人に伝えていかなければならないという使命感を感じたという。今まで戦争の体験談と言えば空襲や原爆を経験したお年寄りの方々が話してくれるというものだったが、原爆を経験したことがない若者が興味を持ち原爆のことについて知り、それを自ら発信しているということに刺激を受けた。

日本は「平和ボケした国」だと言われている。だが、カルガモのエピソードのような心温まる光景は、平和な国だからこそ見ることできる光景だと思う。だから私はこのような微笑ましい光景を守ってきたい。

本物の戦争の話

今沢中学校 三年

芹澤舞香

私たちは戦争を知らずに生まれ戦争を体験していない。私が戦争について知っていることは授業で学習した終戦の日や多くの人が亡くなった悲惨な事件であることだ。

日本は戦後、永久に戦争をしないと昭和二十一年十一月三日に定めた。戦争がない平和な世の中に生まれたことは幸せであることだ。「今日も平和だね」「日本は平和な国だ」と日常会話でも使われることのある「平和」とは何だろうか。満腹になるまでご飯を食べること、学校に通って友達と話したり勉強したりすること、家族みんなで休日をお過ごしのこと。

戦争は残酷で、尊い命が数え切れないほど失われた。深夜には何度も空襲警報が発令され大勢の人が眠れず朝を迎える。サイレンの音が響くことに怯えながら過ごすというのは今では考えられないことだ。

空を見上げると雲が一つもない青空が広がっていたはずの日本。それが真っ黒な厚い煙で覆われていて大きな黒いキノコ雲が不気味に崩れかけていた。空から降ってきた爆弾と重なる死体の山に当時の人々は死ぬ以上の苦痛を感じていたようだ。そのような中で満足な食事をとることはとても難しく、自給自足で食料をまかなっていくしかなかっ

たという。当時は、私たちが当たり前のように食べているお米を食べると「非国民」とみんなから言われるほど貧しかった。

私は家族が揃う時間があることを日常だと思っている。出征した父に会えない子供たちの記事を雑誌で見たととき、二度と全員が揃うかわからない状況で自分と家族の安全を考えるのは簡単ではないと思った。その中に一つの文を見つけた。「どうして戦争をするのだろう」小学三年生が考えるには重く悲しい文章だった。

私は自分の考えと異なる考えを持つ人が対立し価値観の押しつけ合いをするから戦争が起こると考える。自分の意見が正しいと決めてかかり独善的な考えをし合うから起こるのだと思う。つまり自分も相手を尊重し、お互いの価値観を大切にしたいと思う。つまずきながらも戦争がなくなるのではないか。そして戦争が多くなると人々が虐殺される悲惨な事件であることをさらに伝えていくべきだ。しかし、昭和から平成、令和と時代が移り戦争を体験した人たちが減少している。そうすると次の世代へと本当のことを、そのときの思いを繋げていくことが難しくなるかもしれない。

小学生のとき体育館で歌と戦争の話をしてくれた人がいた。インターネットが発展している現代では検索すれば簡単に戦争について調べることができる。私も前日にネットを使って防空壕についてすぐに調べることができた。私はネットで調べたことと重ねてその話をよくある話と思い戦争の話を受けとめていた。しかしネットで読んだ話と戦争を体験した人の話では迫力が段違いだと思った。実際に沖縄の防空壕の話は調べたこと以上の、初めて聞いたことが沢山あった。話

す人の苦しそうな顔を見たとき最初の軽はずみな考えを後悔した。時間が経てば戦争を体験したことのある人が少なくなっていくのは当然のことだ。自分が調べただけでは得られないことを聞いて、次の世代にも繋^{つな}げていくことで戦争をなくしたい。

当たり前なことほど感謝が必要だ。当たり前前に慣れ忘れがちだ。暖かい布団で寝られること、おいしいご飯を食べられること、勉強できること。当たり前であることは幸せである。平和とは感謝を忘れず幸せな日々を送れることだと私は思う。

国のために死ぬるのか

市立高中等部 二年

川村 蛍

片道分の燃料と爆弾だけを戦闘機に積んで敵の艦船に体当たりする。操縦者は「死ぬ」ことが必至条件。これが約七十七年前、第二次世界大戦で行われた特攻作戦だ。

日本は、初めは連勝していた。しかし、次第に日本が負けるようになり、戦況は悪化していった。日本が不利な状況にいることを隠すため、新聞やラジオでは、国民をだます報道が多くなった。今の日本からは想像できないほど、汚いやり方だ。しかし国民は悲惨な生活にも耐えて、日本の勝利を信じ続けた。空襲はひどくなり、多くの命が奪

われていき、追い込まれた日本は、一九四五年、特攻作戦を考えた。

まだ若いのに、敵の艦船に体当たりしに行く。つまり死に行くのだ、受け入れられるわけがない。特攻する日が迫り、自分の死が近づくの感じながら一日一日を過ごす。考えるだけで恐ろしい。だけど、テレビや本で見ると特攻隊は、みんな幸せそうに笑っている。どの写真もどの人も、死を覚悟した人とは思えないほど、曇りのない弾けた笑顔だ。

「お国のため」「天皇陛下万歳」「悠久の大義」今の時代の若者が聞いてもピンとこない戦時中の言葉。これを当時の二十歳前後の若者たちは当たり前のように使い、国のために死ぬことを誇りに思っていたのだ。

しかし、たとえ彼らが幸せだったとしても、私は当時の日本が正しかったとは思えない。彼らにも愛する人、愛してくれる人がいたと思うと、行き場のない思いが溢^{あふ}れてくる。十代や二十代の若者たちを死なせてまで、彼らの将来や未来を奪ってまで、日本は何が欲しかったのだろう。国のためにと、多くの命を犠牲にすることが、国を守るということにはならない。年齢、性別関係なく、人の命を守ること、それが、国を守ることなのではないのか。

戦争は恐ろしい。どんなものよりも、人の命が一番大切だということ、そんな当たり前のことさえ通用しなくなってしまうのだ。戦争は、世間や常識、そして人々を簡単に変えてしまう。特攻隊員という人々は、国のために死ぬることを心の底から喜ぶ。それが常識だったのだ。部活で汗を流したり、社会に出て就職したりする現代の高校生や社会

人とはまるで違う。

それに今の時代、誰かが死ぬのを画面や写真越しではなく、自分の目で見たことがある人は少ないし、普段、生活をしていて命の危険を感じることもない。空を見上げて飛行機を見つけても「あ、飛行機だ」と思うだけで逃げ出さない。それぐらい、今の時代は昔のように死が身近ではないのだ。だから私たちは、「死」の言葉を軽々しく口に出してしまう。「死ぬほど」暑い。課題が多すぎて「死にそう」。今の時代の「死」は、日常会話で大袈裟に気持ちを表現する言葉として、一般的に使われている。

平和な日本に生まれた私たちは、かつて理不尽に奪われた命があったことを決して忘れてはならない。国のために命を捧げた人がいたことを理解し、「死」がもつ言葉の重みを背負い続ける必要があるはずだ。

祖父が教えてくれた 大切なこと

市立高中等部 三年

渡 邊 姫 礼

「勤め勤しみゆくところ。」

そう静かに歌い始める祖父に、私は尋ねた。

「なんの歌？」

「昔の学校の校歌だよ。懐かしいな。」

そんな会話を初めて交わしたのは、私がまだ六歳だったときのこと。

八月十五日、終戦記念日。毎年この日が来ると、いつもの柔らかな笑顔からは想像もできない、強く勇ましい顔つきになる祖父。遠い日の記憶を辿り、小さな少年だった頃に戻ったような姿でそっと口を開き校歌を歌い出す。歌い終わると、毎年異なった戦争に関わる話を山聞かせてくれて、私の知識や考えが深まる大切な時間になっている。祖父が校歌を歌い、話をする。これが一連の流れであるため、今年はどうな話が聞けるのか楽しみな反面、悲惨な過去を想像しなければいけない怖さもあり、私は複雑な気持ちで祖父の歌を聴いていた。歌が終わり身構えていたが、祖父は話を始めずに、ゆっくりと私に問いかけた。

「なにか知りたいことはあるか？」

私はなにも答えることができなかった。出来事だけを聞いて人より戦争のことを理解したつもりでいた自分に対して、情けない気持ちでいっぱいになった。戦争を「昔」の出来事として「今」を生きている私達と一線を引いてしまい、深く考えることができていなかった自分に反省し、もう一度戦争について学び直そうと決意した。

私はまず、戦争にまつわる小説や絵本などの様々な作品に触れ、色々な視点から深く考えることにした。沢山の感慨深い作品の中で特に心に残ったのは「伊澤洋」という青年が描いた『家族』という絵画だ。彼は美術学校在学中に召集令状を受け、二十六歳という若さで戦死している。軍隊に入る前に、彼が残した最後の作品がこの絵画である。

幸せそうな一家のだんらん。彼は平和な世の中で、大好きな家族といつまでも暮らしていくことをどんなに望んでいただろうか。しかし、その願いは叶わず、自分の夢まで奪われてしまった彼の気持ちを考えると、私は心が痛くなった。

また、この絵画は以前聞いた祖父の話と重なるところがあると感じた。祖父は八人兄弟だったため、一人で食べられる量が少なくなり、食料難に苦しんでいた。家では肥料作りをして、まいてできたサツマイモをみんなで分け合い、足りない食料を補うために、一日中他の家で子守り・畑仕事をして手に入れた食料で生活する日々。苦しい生活の中で、家族間での会話も少なくなってしまう、徐々に変わっていく家族の形に、祖父は初めて戦争の恐ろしさを身にしみて感じたという。現代の若者は「家族」と聞くと、どのようなことを思い描くだろうか？互いに助け合いながら生き抜いていく姿。笑顔で食卓を囲み、和やかな雰囲気でする姿。家族と何気ない会話ができること、美味しい物を沢山食べられることなど、何が当たり前なのか、私は分からなくなってしまう。当たり前を次々と人々から奪っていく戦争。私は、二度と起こしてはいけないことだと改めて実感した。

私はふと、祖父の歌っていた校歌を思い出した。「勤め勤しみゆくところ。」なぜ学校へ勤めにいくのか、今までは気にもとめず聞き流していたが、よく考えてみると不思議に思えてきたのだ。なぜか、今の私ならその疑問に答えられる気がした。当時の子供達は国の為、自分の命の為に働く目的で学校へ行っていたのだと思った。深く考えたからこそ疑問が生まれ、私は戦争について学び直して良かったと強く感じた。

今の私達にできることは何だろうか？祖父が私に、戦争について自分で考える機会を与えてくれなかったら、「自分事」として向き合うことができなかったと思う。戦争経験者の「声」に耳を傾け、それぞれのストーリーに思いを馳せて語り継いでいくことが、私にできる最大限のことだと感じた。

受け継いだ意志

暁秀中学校 三年

大 卷 カレン

ある日の学校帰りのことでした。母の車に乗っているといつの間にか、話題がその日授業で学んだ戦争のことに切り替わりました。教科書で見た写真はどれも衝撃的で悲惨なものだったと話すと、母はこのような話を教えてくれました。それはフィリピン人の曾祖父が大戦中に、バターン死の行進を実際に歩いたという話でした。バターン死の行進というのは、太平洋戦争中に日本軍がフィリピン侵攻のために行った移動で、多くの現地の人がある最中に命を落としました。当時、フィリピンの軍人だった曾祖父はその行進で周りの仲間が次々に亡くなっていくのを目にしなければならなかったそうです。

そのような戦争の経験により、曾祖父は現在の私の祖母と日本人の祖父が結婚することにとっても反対していたと母は言っていました。今

まで家族から、戦争の経験や記憶を聞いたことは全くありませんでした。だから、その話を聞いた時は驚きました。今はもう曾祖父は亡くなっていてるので、滅多に聞くことのできない貴重な話を教えてもらった気分でした。また、小学生の頃にバスを一緒に待っていたおじいさんおばあさんと話したことがあります。二人はともに戦争を経験していて、私にこう話してくれました。

「本当に辺りが全部火の海だった。」

今でも二人の真剣な表情が頭に残っています。母やおじいさんおばあさんが、それらの話をしてくれたのは忘れず伝え残してほしいという意志があったからだと考えます。私は戦争の経験を教えてもらおうというのと同時にその人のそういった意志を受け継いだということだと思っています。

いつごろからか、最近はテレビやネットでロシアによるウクライナ侵攻のニュースを目にします。大切な家族や友人、故郷まで奪われてしまった人達を画面越しに何度も見ました。また、それだけでなく、世界各地では未だ紛争が続いています。皆さんも、アフガニスタン紛争やシリア内戦といったものを耳にしたこともあるのではないのでしょうか。これらの紛争はもう何十年も続いています。

私達はその問題から目をそらしてはいけなく私は思います。ではどうすればよいのでしょうか。グローバル化など、世界が繋がっている今だからこそ手を差し伸べる手段は増えてきていると思います。その中の一つとして挙げられるのが寄付や募金です。これは紛争が起きている地域から遠く離れた場所でも行うことができます。

私達は過去に起こった戦争や紛争のようなものを再び繰り返してはいけません。戦争や紛争が終わっても、傷ついた人の心は癒えないし、失われた命が戻ることはないからです。戦争が残す苦しみや悲劇は簡単に消えるものではなく、その人生に一生影響を及ぼしてしまう、深い傷なのだと思います。

今年で、戦後から七十七年という年月が経ちました。そんな今、私達若い世代は受け継いだ戦争の話をどう伝え残していくかを考えていく必要があります。自分の国だけに限らず、世界的な平和の実現を目指していきたいと私は思います。